奥州安達原

作者　竹田和泉

序地中時は康平五つの年。後朱雀院の朝に當つて東夷猥りに逆威を振ひ。王命に背き奉るといへども。詞源氏の武功に切靡け再び治まる時津風。八幡太郎義家公。武威磨立つる鎌倉御所オロシへ暫く鋭氣を養はる。地頃は如月半の空。都より勅使下向ありければ早や門出の日も近づき。取傳へたる梓弓。箭叫の音勢子の聲フシさも厳重に見えにける。地宮居間近く假屋を構へ八幡太郎義家朝臣。執權鎌倉の權頭景成。瓜割四郎紀威儀を守つて扣ゆれば。上座には勅使大江ノ大將維時。冠の紐も長き月も。フシ早や西山に傾きぬ。地維時義家に打向ひ。詞此度某罷下る。勅使の趣餘の儀にあらず。中宮御產の御祈り。此度の大赦に就き奥州の流人。桂の中納言則國召返すべしとの勅諚。奥州は源氏の任國。義家宜しく沙汰すべしとの御事なりと述べらるゝ。地義家ハツト領掌あり。詞中納言則國事は聊かの科によつて。父頼義が任國の砌。奥州松が浦へ流され今に存命。此度赦免の下書義家計ひ奉らんと。地勅答あればコレサ義家。詞流人の事は下狀を以て事は足る。御遽は是より直に上洛。十握の御劍も今において行方知れず。かほどの大事を餘所になし悠々と在國し。鹿狩山狩に日を送るは君への不忠。但し所存あつての事かと。地何がな横を蟹公家の爪を隱せし奸佞邪智。コハ維時の仰せとも覺えず。詞雲上には月花の御翫び。武士の狩漁は軍のかけ引。軍慮忘れぬ武士どもが。未熟の手ずさみ御意に入つて祝著と。地一句の答に返答も何がなとへらず口。詞いか樣音に聞えし貞任宗任。鬼神をも欺く曲者。敵に取つてはこは者〳〵。地隨分と稽古して。敵の首よりこつちの首の。用心が肝要ならんとフシ權威をかさに嘲弄す。地怯へかねて權頭憚りもなく進み出で。詞勅使と敬ひ差扣へ罷在れば餘りしき御一言。先年栗坂の其一戰。小勢を以て大敵の逆徒の張本。頼時を討取つたる其日の軍。勝に乘つて追打ちせざるは軍の法。彼の六韜の誡御存じあつての御批判か。サア御返答承らんと。地詰めかくれば瓜割四郎。詞ヤア權頭。高官に對して無禮の過言。扣へ召されと維時に。

詔ふ奸曲義家それと左右を制し。詞維時公の御批判も。武勇を勵ます御計ひ。武の憤りに其身を忘るゝ景成が過言。何條賢慮にかけらるべきと。地事を治むる明智の詞。地かゝる所へ小林の郷民ども。折に籠めたる鶴十番。御前に差置き中にも庄官とおぼしき男。假屋間近く頭を下げ。詞此鶴日毎に小林の宮居近くにおり候故所の者追ひ候へども少しも恐れず。飼鳥と存ずれども下々の勝手に悪い大鳥。それ故村中が寄合付け。相談の上殿様へ御獻上。宜しく御上の御取次。地頼み上ぐるといひ捨てフシ御前を立歸る。地義家甚だ御悦喜あり。詞誠に鶴は仙家の靈鳥。我が先祖六孫王東夷征伐の其折から。此所にて雌雄の鶴を得給ひ。源氏の武威千歳の後まで。輝くべき印なりと此小林の岡に放し。所を直に鶴が岡と名付け給ふ。地時といひ所といひ旁めでたき家の吉瑞。六孫王の古例に任せ。八幡太郎義家是を放つと。金の札をつけ此所に放し置き。八幡宮の神鳥と普く天下に觸れ流し。神慮を仰ぎ奉らんと惠も深き御上意にフシ皆々。あつと感じ入る。地景成遙の梢を見渡しアヽラ心得ず。詞歸雁行を亂る時は伏兵ありとの兵書の禁。シヤ曲者ござんなれと。地立上れば御大將ホヽウよくも咎めし權頭。詞鎌倉の留守を預ける汝。其心がけを見よう爲のわが計ひ。地伏勢ならずと扇を開き。フシ招かせ給へばコハリ茂みより。顯はれ出づるは此度の。御供に隨ふ勇士のめん〳〵。皆坂東に譽の弓取秩父の。十郎伴の助兼縣の次郎。其外ナホス譜代恩顧の武士フシ早や御立と白幡に靡き隨ふ源氏の威勢。朽ちせぬ黄金の。鶴が岡都をさしてぞ大三巳行く空の。地何事も春は吉田の神社。百さいづりの宮雀。八百や萬の鳥の音も。フシ賑ふ神の誓ひかや。地參り下向もおぼき中フシ人目にそれと。裲襠は。九條の里の戀絹とて。廓に名ある全盛のホフシ松の位の大夫職。二世と兼ねたる戀中の。生駒之助に添ひたやと。歩み運ぶぞ殊勝なり。禿の市彌の不審顔。詞申し大夫さんえ。けふは生駒之助様に逢ひに行くとおしやんして。來て見たりや吉田であつた。コリヤ狐がつまみはせんかと。地いへばにつこと打笑ひ。詞サイノ。久しう便も遠さかり。案じもあらたな神の利生。地大そうな願參り近いと思へど餘程の道。定めてそなたもしんどかろといふ向うより先拂ひ。遠目にそれと流石は大夫詞アレ市彌。そなたが常住拜みたがる生きた雛様。地傍では無禮とフシ花の蔭。地舍人がきしらす御車は。當今の御弟君環の宮。まだ振袖の苦から役目も重き匣の内侍。長地附々賑ふ花の本爭ふ女中の袖袂。

フシ御機嫌斜ならざりし。地馬場先の方よりも歩み來る若侍。武將八幡太郎義家の近習志賀崎生駒之助英。それと見るより遙に飛去り頭を下げ。詞御忍びの行幸とは申しながら。大切なる君の御物詣。主人義家某に申し付け。餘所ながら御車の御供と。地言上すれば匣の内侍。ヲウ流石は天下の武將と呼ばるゝ程あつて。道を守る義家の心遣ひ。詞宮樣にもさぞ叡感。殊更長閑な春の氣色御氣慰みのけふの御供。地物堅き直方殿是非御供とあつたれど。詞どうやらかうやら御所のお留守を。いかにも〳〵。大切なる御所と申し。四角四面な直方殿御遊興の御供には。花も紅葉もくすぼりかへる。ア、何がな宮樣のお慰みをと地見やる木蔭に鷲の首。覗いて見たり引つこんだり招く尾花の鼻の先。冷汗かくとも知らざる女中。匣はそれと見て取つて。詞コリヤ供の者共。宮樣にも殊ない御機嫌。今暫くお隙がいろ。お迎ひは入相の花散る頃早う〳〵に雜色仕丁。フシ殘らず打連れ立歸る。地生駒は此場をくろめんと。眞顏になつて詞アレ〳〵〳〵女中樣御らうじませ。御所方には珍らしい。遊君と申す者。地御覽じた事でござりますまいといふに内侍が何遊君とや。詞江口の君のうかれ女と古今集では見たれども。直に見るは今が始め。地サア〳〵早うに生駒之助。してやつたりと一人笑。詞彼の大夫めが揚屋入りの道中を。今爰へ取寄せてお目の正月させません。それ〳〵そこへ。地もう此處へと眴。仕形を戀絹が。かい取小褄八文字。歌よるべ定めぬ流れの身にも。すいた男の。あればこそ生太夫すかいで是が勤まろか。ア、くだばかりと ナホス生駒が傍。寄らんとするを目と仕形。寄るなとしらせどヲ、辛氣。サハリけふお前と連立つて。詞此吉田で飲み明かすと。さつきにからと。膝に取付きあまえ泣き。こたへ兼ねたる辛抱袋。破れかぶれと。フシ生駒がやくたい。地二人がそぶりを女中達。コレ生駒殿。詞あの傾城はそなたの相方とやらいふものかと。地いはれて悔り心付き。詞ハテさてめつさうな仰せ物堅き八幡が家來廓遊びは夢にも存ぜぬ。ム、そんなら今のは。ハテ客を捕まへて此樣にするが傾城の仕打。そこで客めがたわいになつて。可愛い色を引寄せて地コレ此樣にと抱きしむれば。詞コレ志賀さん。地らつちもない事際入れずと。サアござんせと フシ手を取れば。詞ソレ〳〵〳〵どうでもそなたの馴染ちやと。地睨め上げられて生駒之助。詞エ、近付きでもないくせにいろ〳〵の事ぬかす故。あなた方への言譯なし。地イヤお前がわしにと又取付き。兩手をぢつと引締

めて。詞かうした所が廓の口舌。まづあら方はこんなものと。塊口から出次第言ひ次第取付き引付く。フシ向うより。塊歩み來る瓜割四郎朱鞘の大小いかつげに。それと見るより強腹ながら。詞ヤア生駒殿。主人義家大切なる急用あり。早う。塊／の聲に恟り飛退いて。詞急御用とは覺束なし。貴殿樣子を聞かずやと。塊立寄る生駒を突飛ばし。詞大切なる役目を受けそれに何ぞや女を捕へ見苦しき振舞。何かは御用も我等は知らぬ。塊早やおいきやれとねめ廻す。纐絹生駒は目を見合せ。フシ道理に詮方なげ首し。心殘して立歸る。塊續いて立つ纐絹を。四郎が止めてコレ纐主。詞エ、われは／。首だけ惚れてゐる四郎。振つて／ふり付け。生駒にばつかりきつい乘り樣胴慾ぢやぞよ。エ、癸な塊命取めと。フシしがみ付く。ふり放して逃げ行くをどつこいならぬと又取付く。ア、これ申し。どうぞ往なして拜みます。イヤ／／。拜むのはこつちからと詮方なんぎの最中へ。詞鳥を差いた見さいなさい鳥さいた見さいな。塊何にも得とらず。フシ餌差竿。塊物見だけい女中達ソレ／宮のお慰み。四郎とやら其鳥差此處へよびや。四郎。々々に詞ハア、、、。鳥差お召しぢやうせをれと。塊いふ間をはづして纐絹が。フシ逃げ行く跡になむ三寶。詞大事の鳥を飛ばしてのけた。塊鳥差め覺えてをれと。フシつぶやき跡を慕ひ行く。塊鳥差は立寄つて餌竿をおろし斜に構へ。詞一つひよ鳥比叡の山の。二つ梟二子の山に。三つ木兎塊都鳥そこよ。かしこと立舞ふふりにて匣の袖へ投げ文を。フシひら／の。檜木の枝とそらさぬ風情。フシ文取上げて匣の内侍。詞ハテいぶかしき賤の振舞。塊文投げ捨つれば女中達。詞下々の身分で内侍樣に付文とは。大それた慮外者。早や立つて行け／と。塊せり立てられてもびくともせず。詞下々であらうが何であらうが。纐に上下の隔はない。但し又鳥差が上つがたに惚れる事はならぬといふお觸でもあつたか。何でも思ひ込んだ此男。返事聞かねばいつかな／と。塊人目遠慮もあらくれ男。アレ狼藉者誰そ參れと。呼べど下合ふ人もなく隔つる女中をはり退けぶち退け。傍若無人の狼藉に。内侍は宮樣かひ／しく。なう／こはやと局達神前さして逃げ行くを。詞おのれ女め一掴と。塊大手を廣げ逸散にフシ跡を慕うて追うて行く。塊内侍は宮を誘ひてつまづき轟び出で給ふ。跡から逸散かけくる鳥差。詞内侍樣まんまと首尾よう參りました。樣子は今の文の通り早う／／とせき立つれば。塊匣は宮を伴ひて何い

ふ隙も嵐に連れ」フシ何國ともなく落ちて行く。地かくとは知らぬ女中達おろ〳〵目にて走り出て。コリヤ〳〵詞鳥差。宮様どつちへ連れいたと縋り付くを踏飛ばし。詞ヤア宮が見えねば身が知らうか。そこ退け通せイヤ〳〵〳〵。そなたが連れ行た宮様をこつちへ戻しや。イヽヤ知らぬ。イヤそなたがと爭ふ半。地傭仗直方御歸館遲しとかけ來る松蔭。様子を斯くと駈寄つて鳥差が左の脇つぼ。丁ど入れたる鑁の當身。詞コレ〳〵〳〵宮様はいづくにおはする。匣殿は內侍はと。地問ふも苛立つこなたもうろ〳〵。あの鳥差が狼藉故。宮様伴ひ匣様はあの道へと。地いふ間もわくせくかけ行く女中。扨こそ曲者吐かして聞かんと又一當。むつくと起きる間稻妻の。フシ懷劍咽につき立てたり。ハヽヽヽ詞なむ三寶詮議の種へツエ地死なしたりと氣は夕陽。車輪の如くかけ廻り。さもあれいかにと死骸の懷中。手を差入れて引き出す一通。さつと披いて讀下し。詞何々環の宮を盗出し給はるべしと。匣の內侍へ賴みの狀。何者とも名を記さぬは。朝廷に蔓る佞人。大江の維時なんどが所業か。何にもせよ。逆臣に出しぬかれしか。地エヽロ惜しやさりながら。詞これこそは詮議の手がかり。究竟一通懷に。しつかと納むる忠臣の。心の闇の道筋を逸散にこそ三重歸りけれ。地西洞院左女牛の殿造。八幡太郎義家朝臣。再び鎭守府將軍に御拜任の御悅びとて。在京の大小名思ひ〳〵の御獻上。飾る口上使者袴。奏者の女中が受答へ。フシ花を散して持運ぶ。地鬧しい中ちらほらと一つ小蔭に寄りつどひ。詞葉櫻様何と御家中も多い中。よい男といふは生駒之助様。かはいらしい殿御ぢやないかと。地いへばみはしがサイナウ。詞したが顏に似合はぬ物堅さ。其顏に似合はぬで思ひ出した。茶の間の楓があの顏で生駒様を付けつ廻しつ。何と身の程知らずぢやないかいのと。地譏る後へによつと出た頰はすもゝの花楓。櫛笥鏡臺携へて。詞ヲヽ皆様聞いておくれ。わしが此様に思ふのに。生駒様の聞入れのないはどうした事と思うたりや。あのお方は傾城ずきで。こちらが様な大むくは嫌ひ。それでわしも今から派出に身を持つて。生駒様に思はれうと。コレおぐし上げの磯野を賴み。結うて貰うた此釣舟。地似合うたか見ておくれといふ目付のしたゝるさ。こらへ兼ねて吹出す。フシロの間より。地御家人瓜刺四郎紀。袴の角菱いがんだ頰付。詞ヤア何ざわ〳〵と女郎ども。ヤラぬは楓めエヽ惡ぐさいやつシテこりやお玄關近く。女の手道具見苦しい。ばか者めと地蹴飛ばかされて散亂粉灰。

フシ皆々次へ逃げて入る。詞ヤア面倒な此手道具。持つてうせぬか。誰そ取つて捨てよとフシ呼ばはり〳〵奥へ入る。地御門の方騒がしく出をらう〳〵と下部が聲。様子は何か白洲先かいどり小づま フシ八文字。詞ヤア女め待て。御家中に見馴れぬ風俗胡亂やつ。サア名をぬかせ聞かねばいつかな。ホ、、、、、。合點が行かぬの聞かねばならぬのと。無理な客様の色事をせかんす様に。ヤア扨は儕賣女よな。此處をどこだと思ふ。忝くも八幡様の御屋敷。サア出をらうと引立つるヲ、無粋。人の心も知らずに。其様に呵らんすものぢやない。其八幡様の御家來。生駒之助様に逢はねばならぬ譯あつて。コレよいお人ぢや。誰やら表へ逢ひに來てゐると。ちよつとあの様をこゝへ呼出して下さんせ。ホンニ又此生駒様も。何して居さんす事ぢややら。早う逢ひたい地出て下んせぬ事かいの。エ、辛氣やと式臺に。身を投げ島。田するせんの フシ流ははでに顯はれり。詞ヤア情のこはい下司女。意地ばらば薪ざつぱとひしめく聲。地何事やらんと立出づる志賀崎生駒之助。一間をずつと顏見て悔り。矢庭に庭へ飛石の。堅い顏付き氣色を變へ。詞ヤア下郎ども。御座の間近く尾籠の高聲。ハイヤ此女め胡亂者故引捕へて。ヤア生ぬるい。わいらで行かぬ身が詮議する。早く下れ何馬鹿やつと。地呵りちらして追立てやり。邊を見廻しつゝと寄り。詞コレ戀絹嗜めコリヤマア何事。物堅きお館の格知つて居ながらはでな姿で晝日中。お上へ聞えたら生駒之助は痛い腹。サア人の見ぬ内に早く。地早くといふ間も若しやと胸どき〳〵。せく男よりせき入る戀絹。コレ生駒様。ひよんな事が出來てきて。それでお前に逢ひたさにヤア〳〵なんぢや。ひよんな事とは氣がかり。其譯をサア早く。サアイナ。其譯といふは。客は誰か知らねども。わしに合點もさせず身請の相談。親方がいに手附まで受取つたと。聞くとはつたりコレこの痞。地どうかかうかと案じる折から。詞駈落してこいとお前の知らせ。ヤア〳〵〳〵そりや誰が。四郎様が。ヤア何あの瓜割四郎がさう言うたを。誠と思うてスリヤそちは廓を。アイ地駈落してきたわいな。ホイ。地はつとばかりに生駒が當惑。ハテ合點の行かぬというてゐる間も其方のこの形。人が知つては一大事どうぞ隱して置く所を。エ、どうせうぞかう障子明ける物音出る楓。見付けられじと戀絹を。フシ小陰へ押しやりそらさぬ顏。地楓は其儘すがり付き。エ、氣の悪い生駒さん。今のしだらはどうぞいな。地あの子ばかりが眞實で。惚れぬいてゐるこの

わしは。うそにいとしと思ふかと見捨てられたもあの子故。アノ傾城と譯ある事今の樣子も書置きして。私やいつそ死ぬ覺悟と。用意の剃刀生駒は驚きマア待つた。死ぬるとは短氣千萬。そしてアノ傾城と身共が譯を。書置にしてよいものかと。地留める兩手をじつとしめ。詞さういはんすは。叶へて給はる心かえ。デモそれは。そんなら死ぬるイヤ放したと。地聲高に。こまつて詮方雜儀の手詰。そんなら應ちや。エヽ嬉しやと抱付かれ。顏をそむける生駒が思ひ。生ぐさ坊主が精進のフシ馳走に禮いふ心地なり。地折もこそあれお客のお入りとのゝめく聲。何がな幸ひコレ〳〵〳〵。お客のお出と引つぱづして逃行く生駒。詞コレ志賀さん。夫婦の固めはわしが部屋。地必ず待つて居るぞえと。尻ふりちらして フシ走り行く。地糧もなくのつさ〳〵入來る權威の鼻。大江大將維時打紐したる白木の箱。雜掌笠原軍記に持たせ傍見廻し聲をひそめ。汝も兼て知る如く年來の我が大望。宵公家撃は大半味方になすと雖も只手ごはきは。八幡太郎義家平の傳伎直方。きやつら兩人禁廷にへちまへば。何かと手延無念至極。何卒罪に落さんと肺肝を廻らし。なんなく直方は術の網に打込み。けふ中に仕鉾ふ合點。この上は義家一人。彼が家來瓜割四郎我が味方に付けたれば。十が九つ大望成就。たゞ儘ならぬは戀といふ曲者。義家が女房敷妙。色々と心を盡せど今に色よき返事もせぬ。何でもけふは此艶書を合點かと。地渡せば取つて懷中し。詞今日中に御手に入れん。必ずぬかるな合點と。地愁と色との間の襖。出迎ふ瓜割四郎維時が傍近く。お頼みの通り生駒之助しくじらす術上首尾。彼奴がなじみの傾城を此館へ引入れ。それを越度に打殺せば風の神で戀の敵。地戀絹を我が女房にといふもぞく〳〵でかした。〳〵幸先よし。艶書の事を軍記合點か。瓜割必ず仕損ずなと。地二人を立たする間もなく フシさと打薫る。絹の香は。義家の奥方敷妙御前。禰宜檜姿もしとやかに。詞維時公には御苦勞の御出で。夫義家早速お目にかゝる筈なれども。今日は非常の大赦何かと取込み罷在る。無體の段は眞平お赦し。御用の品もあらば私にと。地聞いて維時威儀繕ひ。詞ヤ義家の御内證此頃は打絶え申した。其許の親父直方には。御預りの環の宮行方なく。老人の心遣ひ。そこにも親の事なれば嘸案じ召されう。それは格別。某けふ罷越す事別儀ならず。義家には近近東國へ遠發。門出を祝はん爲。維時が寸志の音物。地改めて受納あれと件の。フレ太刀箱さし置けば。詞これは〳〵

何から何まで御親切の御詞。殊に夫が門出を御祝ひとは。義家にも嘸悦びと。地蓋押し明くればこはいかに切柄したる新刀の刀。悔りさすがは武將の妻。さあらぬ體に取上げて。詞武士の門出に打物とは。御心の付きし御音物さりながら。これは正しく科人を試す不祥の刀。地といふを抑へてコレサ敷妙。詞心を籠めし我が音物。婦人が聞いて何を判斷。義家に見すれば胸に覺えのある事さ。とつくりと思案をして。其刀の返答を相待つと。某が申すといはれよ奥方と。地割つて言はざる切柄は。いかさま仔細あら身の刀。鞘にしつくり納めても。心のときつき納らぬ。フシ氣を取り直し。詞姫御前の智恵に及ばぬ事。義家に右の品。お出での様子も申し聞けん。役目濟むまで暫しの内は。ヲヽサ〳〵。其刀の返答聞き切るまでは歸らぬ維時。地案内召されと權柄。横柄敷妙にオクリ打連れ。へ一間へ入りにける。地口の間より奏者の女中生駒様〳〵とフシ呼びつゞ聲。地生駒之助これにあり何用なるぞと立出づれば。詞申しあなたにお目にかゝらうと。九條の廓の亡八とやらいふ者が。ヤア亡八が來たか。コリヤたまらぬ。我等が逢つては事むつかし。こなた衆頼む。地コレかう〳〵と耳に口。小陰にありあふ梯笥鏡臺フシ抱かへて奥へはづし行く。地程なく白洲へ小腰をかゞめ。詞ハイ私は九條の傾城屋文字屋の友三。是なは請人の惣助でございます。私抱への奉公人戀絹と申す女。さる方へ身請極まり手附まで請取りました。處に夜前廓を駈落ち。何が方々と尋ねますれどもとんと行方が知れませぬ。察する處戀絹が深間といふはこれの御家中生駒之助様。身請を嫌うて廓を出たからは。外へは參らぬこのお屋敷に。ア、コレ〳〵こゝは殿様のお白洲先。麁相な事など申上げたら。ア、申しおつしやるな。お前方は素人。慮外ながら文學の友三というて。ずんと黑い男。ソレ〳〵此惣助も身晴。何ぢやあらうと生駒様に逢うてのおりのり。又逢はしやれぬが最後奥へ踏込み直々にと。地口を揃へる亡八がゆすり。一間の内に大音上げ。詞ヤア〳〵八幡太郎これにあり。汝等下々の分として上を恐れぬ推參者。引括つて牢へ打込む。地覺悟しをれと道具屋かさ高に襖くわつたり立烏帽子。大紋くわつと目の中の。きよろ〳〵するもナホス思ひなし。威に恐れてとんばう返り。ハア〳〵お赦し御免と後じさり。地弱い所へ附込んで。詞ヤア一寸も動きをるまい。ハア返答が悪いと首が飛ぶも知れぬぞ。思へば〳〵につくいやつ。傾城も同じ女。かはいさうにいやな男に身請とは汝等が身

勝手。すいた男に添はしてやるか。ハ、ア〳〵そんなら赦してこます。地あのごくだうめがと強う見せたる足拍子はずみにすつぽり立烏帽子。結びめ解けて櫛拂の頬髭落つれば傍邊。ハツト生駒が取りのぼす顔のゑのぐも汗たら〳〵。フシ所斑の八幡大名。地俄にしよげる顔を見て詞ヤアこなたは生駒之助と地いはれてなむ三しくじつたと天窓抱へて逃げ入れば。ヤア大騙の生駒之助金の代りに連れていんで廓の法の桶伏と。フシかけ入らんとする一間より。地兩人控へよ先づ待てと立出で給ふは。義家の妹君名も八重幡の九重に。フシ花もおさるゝ品形。詞コレそこな亡八とやら。其様に詞を荒し。若しも此事兄義家様のお聞きに立たばそち達が身の上。生駒之助とても同じ事。そこを思うて留めに出たは自らが情。なんと其戀絹とやらが身の代を辨へなばそち達に言分はあるまいがの。何が扨お金さへ受取りますれば。そんならば其傾城自らが身請した。それ持つて早や歸れと。地寢耳へ水の山吹より花も實もある取捌き。コハ忝し有難しと戴き勇み亡八やは丸條をさして立歸る。生駒は面目中敷居出るも出られぬ此場の品。戀絹は一間より姫の情の有難さスエ出づるもおもて。伏し沈む。八重幡はしとやかに。詞姫ごぜは相身互。何の禮に及ぶ事。地かうして世話をする身にも心に任せぬ憂き思ひ。物馴れしそもじを便り。力になつてとばかりにてフシ思ひ。入りたる御風情。詞アノお姫様の改つた。大恩受けた此身の上。お心に叶はぬ事あらば何なりとサアおつしやれどうぞいなと。地いはれていとゞ恥しさ思ひ初めたる戀人に。下束の數は重なれど。詞モウおつしやるな讃めました。戀の手管は勤めの道。私がかう申すからはお心強う思召せ。シテ其惚れてござんす殿御といふは。お公家様がお大名か。イヽヤ大名でなし公家でなし。そもじの馴染の生駒之助と。地聞いて悔り差當る恩と。情にからめられ今更何と思案さへ。壁に生駒が。聞くぞとも スエ思ひ。極めて傍に寄り。詞二人が譯を御存じの上私へのお賴みは。よく〳〵せつないあなたの戀路。切るに切られぬ中なれど。いつそとんと思ひ切つて。私がお世話致しませうと地いふをこちらに立聞いておれを思ひ切つたとは。うそか誠かとやかくと氣はもめくさの袴に汗。姫はいそ〳〵嬉し顔。わりない無心此上は。只よい様にと袖口に。フシ紅葉かざして入り給ふ。地かげ見るや見ずつか〳〵〳〵。胸ぐら取つてコリヤ戀絹。詞エヽ汝はな。アイヤモ見さげ果てた根性。さういふ心とは知らず。地つもられたが殘念なと引い

つ廻しつ打叩く手に取付いて。詞ヲ、よういうて下んした。女房ぢやと思はしやんすりやこそ。打ちもさしやんす擲きもさんす。地お前の様な眞實な殿御が又と世界にあろかいな。身請して貰うた義理にせまり今の様に姫君様にいうたれど。お顔を見たれば退きとむないやつぱり元の夫婦ぢやと。男の膝にすがり泣くフシ わりなき有様立聞く八重幡悟氣の中にも二人が心。思ひやる方あら氣の生駒。詞エ、いやらしい退いてくれ。心底の腐つた女。顔を見るもけがらはしい。大方おれがやつた誓紙も身仕舞部屋の梳き紙。油くさい狐艮よい加減につまんで貰をと。地ついと立つを待たしやんせ又疳癪の惡がうか。そも突出しの其日より言交した互の誓紙。肌身離さず此守にコレ見さんせと取出せば。詞イヤ〳〵まだ其守の中に何やらある。エ、疑ひの深いお方。これはわしがとゝ様の形見。大事にかけねばならぬ物。マア其大事がるが地合點が行かぬと引つたくつて。詞隱し男様の誓紙の文言ドレ拜まうか。何ぢや。奥州六郡の主安倍太夫頼時。法名大了院殿喜山大居士と。地讀みも終らずコレ戀絹。詞スリヤ此頼時といふは。アイ私がとゝ様でござんすと。地聞いて悔り一間に立聞く義家公猶も窺ひ。フシおはします。地生駒之助つつと立ち。詞縁はこれまで戀絹と。地思ひがけなき夫の詞縋り付くを振放し。詞添はれぬ譯は其書いた物。頼時が娘とあれば朝敵貞任宗任が兄弟。知らぬ昔は是非もなし。源氏に仕ふる生駒之助。朝敵の血筋に繋がつては主君へ不忠武門の穢と。地言はれて應へも涙ぐみ。地けふまで包みし我が身の系圖。とゝ様はくり坂の合戦に流矢にてあへなき御最期兄様達も皆散々行方定めぬ憂き勤め。不圖剛初めし二人が中。起請誓紙を忠義にかへ。詞縁を切るとのお詞を。地無理とは。更々思はねど。お前に別れてそもやそも此身は何と。フシなるぞいな。詞エ、死なしやんしたとゝ様も聞えぬ。兄様達も兄様達。よいかげんに朝敵もやめにしたがよい。お前の様な男と敵味方になる様な鈍な軍があるものか。地私が縁の邪魔になる兄様達。こつちから縁切るほどにコレ堪忍して下さんせ。エエなあ申しコレ申しとフシくどき嘆くぞいぢらしき。地始終をとつくと義家公一間をさつと押明くる。音に二人は消入る雪。フシとけぬ此場を逃げて入る。地大将端近く出でさせ給ひ。詞ヤア〳〵誰かある。召還せし流人とも殘らずこれへの詞の内。地ばら〳〵出づる歸洛の流人。籠をフシ出でたるいさみ足。地瓜割四郎御前に向ひ。詞常磐島はだか島竹の浦松

が浦。いづれも奥州一國の流人都合二十七人相揃ひ候。ヤア〳〵汝等謹んで承れ。此度非常の大赦行はれ國々の流人赦免ある。さるによつて奥州一國の流人は我が君へ仰せ下り召還したる汝等。有難く存じ奉り何國へなりとも立退くべしと。地上意にはつと流人ども悦ぶ聲は叫喚の。地獄で佛に逢ひたる如くフシ拜みつ轉びつ出でて行く。ハルフシ跡へしを〳〵立出づる。ギンこれも流人と白洲のさき下オスなりも形もしよげ鳥の。フシ身すぼらしげに蹲まる。詞義家遙に見やり給ひ。奥州の流人則氏とは御身よな。早速の入浴此上なしと。地仰せに流入謹んで。親にて候則國勅勘を蒙り奉り。流人となりし其頃は我未だ弱冠。成長するに隨ひ父諸共昔を戀ふる憂き年月。裏真海人の苫屋の煙と俱に。父は空しく相果てて。詞生きたるかひも荒磯の島守にて朽ちなん身の。地召し返さるゝは大君の御惠み。偏に武將のお情と。スエ低頭平身ナホスなしければ。詞なに父の卿には空しくなり給ひしとや是非もなしさりながら。今日歸洛の此上は。父則國の本官を直に桂中納言教氏卿いざまづこれへ。誰そ御裝束參らせよハツト地女中がとり〳〵に。木綿の島守引きかへて。冠裝束花やかに。忽ち雲の上人の。本フシ威も備はつて見え給ふ。詞其裝束を召さるれば。貴公は高官武官の某。憚りありとフシ上座に。進め給ふにぞ。地コハ痛み入る御禮儀。詞今迄は天下の流人。今よりは朝家の近臣。地百官百司に列る上は所存を包むは君への不忠。天下の武將義家に桂中納言教氏が。三ケ條の不審あり。詞まづ第一には。三種の神器の其一つ十握の御劍。先年より紛失し御行方知れさせ給はず。禁門の外は武將の守る所。天照神より傳はりし御寶。草を分け地を穿つてもなぜ詮議しめされぬ。第二には環の宮。御行方ましまさず。これなんどは朝廷の御大事。察する處都間近く叛逆謀叛の族が所爲と。鏡にかけて顯はれたり。地さすれば奪はれし直方に其疑ひなきにしもあらず。直方は御邊が舅と聞き及ぶ。緣に引かれてゆるかせに差置くなんど世の人口は塞がれまじ。此三つの返答フシ聞かまほしとありければ。詞ハツア流石は文道に名を得給ひし桂中納言教氏卿。御尤もの御不審一々承知仕る。併し此御返答は。義家存ずる旨あれば參内の折を以て。いかにも然らば再會々々地おさらばと。見送る式臺別れの禮儀。袂も匂ふ初冠大内指して歸らるる。地大將維時一間を立出で。詞最前數妙に渡し置く刀の返答言はずと胸に覺えがあらう。舅直方が誤り一家とて容赦はなるまい。首討つて渡されよ。イヤさう

は罷りならぬ。環の宮を奪はれしは一應の越度ばかりでない。大切の詮議ある直方輕々しく首討たば。宮の詮議は何を以て仕らん。ちと御麁相に存ずると。地やり込められて負けぬ顔。詞左程拔目なき義家が。家來の不義はなぜ詮議せぬ。ソレ軍記。地承はると笠原が。引立て出づる戀絹生駒。詞何と見られしか。主の屋敷へ傾城を引入れる放埒侍。我が家の事さへえ知らぬ御邊。天下の武將心許ない。是でも見事大切の。詮議をするか義家と。地何がな惡口嘲弄も理の當然にさしもの大將拔。差ならぬ此場の時宜二人をはつたと蹴落し給へば。身の誤りに詞なく。白洲にフシ頭を埋み居る。詞ヤアヤア敷妙。最前の切柄の刀持參せよ早く。地〳〵と詞の下。夫の心は白鞘の此刀は何の御用。詞ヲ、不義者めを成敗する。エエ不便ながら武將の役目。ヲ、さうなうては濟むまいと。地嘲る軍記が眞甲梨割フシ二つになつてのたれ伏す。詞ヤア笠原には何科あつて。サレバ此奴大不義者。御寵なされあらう事か。女房敷妙に斯樣の艶書。傾城狂ひは時の興。强ち不義とも申されず。主ある女に不義しかけるは。畜生と申さうか。成敗したが誤りか。科の吟味立すると。どこへ飛沫がかゝらうやら。それともに御不審あらば。地承らんと和かに。肝の束を指通され。詞ム、尤も。扨々軍記めは存の外なる不屈者。逆磔にもかくべきやつ。手討とはまだ御了簡。シテ兩人が成敗は。ヲ、傾城狂ひの放埒者。勘當致して阿呆拂。ム、是も尤も。某も長居は恐れ。尤もなる趣宜しく奏聞致さんと。二つ胴を遁れた心地。フシ足早にこそ歸りけれ。地言譯なみだ生駒之助刀逆手に取直す。ヤア犬死せんとは狼狽者。追放の身に入らざる武士達。最前一間より立聞けば。其女は貞任がナ。定めて遠い國の者。馴れなじみしこそ幸ひ。夫婦となつて隨分添ひとげ。彼の本國へ立退かば究竟の手がかり。心得たるか。環の宮の行方が知れねば。勇直方は大罪人。時宜に依つては敷妙が。緣の切目とならうも知れぬ。添ひとげるも義理。添はれぬも。浮世の義理と諦めよと。地八重幡姫の事までも思ひやり戸に忍び泣き。緣の切目と嫂の。情の綱襠顏と顏フシ餘所に。見なして入り給ふ。地かゝる所へ笠原が弟同名軍六。兄の敵遁さじとフシ大勢引具し追取りまく。詞それと生駒がコリヤ〳〵戀絹。これで防げと一腰を。地しやんと柳の腰車。石げさ肩げさまくり切り。ハズミ逊ぐるをやらじと女夫は白刄奥庭深くへ追うて行く。フシすでに時刻も。宵闇に外面を窺ふ笠原軍六。生駒が手竝にもてあまし一拔ぬ

けたる抜けがけは。敷妙を奪取つて我が高名にと一人笑み。あの亭こそと裏門の。塀に身をよせ耳を寄せ窺ふ内には戀絹が　フシ多勢を切拔けそこかしこ。詞是を足場にあの塀と。差したる刀拔放し突込む切先軍六が。胴腹思はず　地芋串に。フシのた打廻る鰻武士。地内にはそれとも白壁に柄の足代。塀の上。フシひらりと飛びたる折こそあれ。詞多勢を薙立て生駒之助。女房出かした維時が。家來軍六を手にかけしは。忠義の門出手始めよしサア戀。絹と突立つ所へかけ來る瓜割大音上げ。ヤア扶持離れの生駒之助色事仕かと思ひの外手にぼうばつたる汝が働き。ソレ家來ども討つて取れ。承はると近寄るやつばら。から竹梨割瓜割主從　フシ敵はぬ赦せと逃失せたり。地返す敵も並木の馬場。さはいへ名殘と見返る生駒我も。廓をけふ限り。其うきふしもよき武士の。つま引上げて引きしめて。これよりすぐに打立たん。其行先は不破の關清見。白川衣が關忍の。關はありし身の。口舌の柵手管の關鳥の。鳴くさへ憎かりし。今の此身は鳥の音に。函谷關を越えたる例。頓て目出たき世にあふ坂の。關所々々をやす〳〵と吾妻の。空へと急ぎ行く

第二

地琴棊書畫を嗜む身とも生れず。明暮物の命を取り浮世を渡る網手繩。浪打際にフシざわ〳〵と。かづきの海士が晝休。詞コリヤ長太のおかた。今日はお代官樣が。此外が演を通らしやると浦中はもや〳〵。すつきり仕事も手に付かぬ。聞きや此中は長太も潜に出やるげな。女夫しての拵ぎいかう延びたと浦邊の噂。ヲヽあの茂三の内儀の云やる事わいの。銀は延びいでこちのアノ性惡が。鼻毛の延びるに困り物。四郎のおかたの知つての通り去々年の月見の夜さり。臙脂取りにいた時に海の中でどれ合ひ初めた女夫中。ヲヽそれ〳〵其夜さりうらも岩の狹間でこちの人に馴初め今は子の親。こなたはなぜに子が無い。ヲヽ子どころかいの。眞實に思うてゐるわしを袖にしくさりくさつて。又しても女さへ見りや帆立貝。ホンニ。うらが思ひは鮑の貝の片思ひぢやと思へば悲しうござる。ヲヽこりやおかたのが皆道理。シタが。そなたばかりぢやないぞいの。海商賣とてどこの男も磯ぜせり。地こちとらも修羅はたえぬと三人寄れば。フシ男の噂。詞ヤイ〳〵〳〵又男のわんざんかと。地いうて海からによつこりと。上つてくる海士の長太。詞あんまりわいらが譏る故海の中でくつさめばかり。漁が利かいでやう〳〵と四五

はい。これでは。鹽も呑めるものぢやない。と。地いへば皆々モ我をれ。男の仕事には大きな物これでは女海士もはだし。ドレいんで取溜の鮑内でむいたりむかしたり、サア皆おじやと打連れて ワシ住家住家へ立歸る。 ワシ磯邊傳ひをくる女房長太が見付てヲイ〳〵。文治の内儀どこへちやと。呼びかけられて立止り。詞ヲ、誰ぢやと思うたら長太樣。内儀樣御精が出ます。聞いて下さんせ稚兒が長の煩ひ。弱みの上へ大熱けふは取分け樣子が悪い。それで濱手の醫者殿へ藥を貰ひに。ホンニ此間の心づかひ。わしも癪が發りさうな。地ヲ、それはいかいこな樣の氣もせやと。女房がいふを引取つて。コレ詞内儀其癪にはきつい妙藥があつて。醫者に貰うて置いた。待つて居やしやれ一走つい取つて來てやろ。コリヤかゝ何をきよろり。今の日和は何時か知れぬ。そよ〳〵と良い風が來る此間に一精出してこい。地若ししけが來さうなら此繩で知らすぞと。約束の千尋の繩。腰にしつかり女房が。舟端より眞逆樣。ワシ物馴れし。こそ身過なれ。地繩繰りこして舟張のくわんに手取り早く。詞サアかかめは沖へやつて仕舞つた。地モウ邊に人はなしと口なめずりして上つてくる。長太が素振に氣も付かず。そんなら世話ながら今云はしやんした癪の藥を。どうぞ早うと立寄れば。詞へ、藥やろというたは嘘ぢや。地待たして置いたはかうせう爲ぢやと引んだかへ。詞テモうまい風ではある。此尻つきにふつとのぼつていんまに下らぬ臍の動氣。お前の此藥で直しておくれ。たつた一服で本復すると。地抱付けばひつしよなく。詞何さしやんす。夫のあるわしを捕まへ。ぢやら〳〵と何ぢややら。鹽だらけな體して。地あたワシ舌たるいと突飛ばせば。詞それはどうよく。たつた一度。どうもならぬたまらぬと。地抱きしめ〳〵抱きしめられ何とせんかた渚の方。浪間へ響く鐵棒の音に悔り振返り。ヤア南無三所の代官め。コリヤたまらぬとさしもの悪者。せう事なぎさに心を殘し其儘海へづぶ〳〵。こなたは嬉じさ此場の難儀。遁れて醫者へと走り行く。地程なく出でくる所の代官。鵜の目鷹右衛門跡から庄屋が短い羽織。長い鼻毛を砂にすり付け。ハイ。詞かう並びましたが此濱の組の者ども。此浦邊は漁獵師男海士潜の聟。其外山を拝ぐ獵師も入込み。外商賈は僅か故。總名を獵師町と申しますと。地聞いて代官打點き。詞ム、然らば山獵師もあるとな。浦方はいふに及ばず。山獵師には別してきつと申付くる法度の趣。先達ても聞きつらん。鎌倉鶴が岡の神前にて。千羽の

をお放しあり。則ち氏神の御つかはしめと世に知らせん其爲に。金の札を付置かる。さすれば右の神鳥。何國の浦山におりたりとも必ず麁略致さぬ樣との御上意なりと。地さも緩怠に云付け睨付け。フシ濱手をさして打通る。地惣打眺めて浦の者。詞サア〳〵濟んだわ。ア、お年寄御苦勞〳〵。何の〳〵どくらうはしくらうの上の事。皆も今のお觸合點か。金の札の付いた鶴撃つ事はならぬぞや。鶴は愚か。こんな時には鷲でも必ず撃たぬ樣。地皆念入れて觸れうぞやと フシ打連れてこそ歸りけれ。地お谷は醫者よりとつかはと。フシ心も足もいそ打つ浪の。中から出てくる以前の長太。かけ上つてほうど抱へ。詞サアしてやつたさつきには。うまい所を代官めが。うせたで怖さに巣入したれば。鮸と赤貝と口吸うてをつたを見て。イヤモどうも堪へられぬと。地しがみ付かれてお谷はうるさく。詞サア〳〵まあコレ爰放して。イヤ放したら逃げさんす。慈悲ぢや情ぢやコレ拜む。サ、ヽ、ヽ、どうなりとせうけれど。晝中にそんな事イヤだんない〳〵。爰でいやなら。海の底でついづぶ〳〵ア、滅相な。驚かなんぞの樣にこちや水へはよう入らぬ。そんなら幸ひあの舟で。結ぶの神は舟魂樣。地サア〳〵此方へお出で〳〵。エ、こりや何とする放せ。〳〵。こちの人文治殿と呼べど叫べどかひなみだ。詞コリヤ泣かんすか。泣くとは別して忝い。地可愛男にや泣きよが違ふ。足を屈めてゐのふで締めて。〳〵ハ、ウしよがいの〳〵コレ此樣に。しめておくれと。引立て引きずり舟の中。詞なんぼ泣いても喚いても爰はモウ海の中。其樣にびん〳〵するといつそかうぢやと 地舟張の。千尋の繩を帶にしつかり。かうして置いてと抱き付けば。詞エ、穢らはしい情ないと身をもむお谷が帶の繩。千尋の底へこたへてや。遙の沖へうつぽりと浮上つたる長太がかゝ。遠目にそれと見るよりも逆立つ浪を立泳ぎ。其儘舟へ飛上り。詞ノリすつくと立つたる丸裸鱗だらけのさばき髪男を引据ゑくゝりし繩解くより早くお谷は磯へ逃げ上る。やらじとあせる長太が腰蓑引きずり廻しの結目に。地くゝる千尋の繩ぐる〳〵夫に向つてつく息は。詞道成寺を見る如く七卷縋うて詞サア長太。こつちへおちやと飛込んで泳げば繩に搦込まれ。コリヤどうしをるも。地閉けばこそ。水には強き女房の元氣引立て〳〵泳ぎ行く。ハルフシ お谷は胸を撫でおろし フシ立上らんとする所へ。地戻りかゝる善知鳥文治。山より山に獵りくらす海部刀の刃を渡る。腰に半弓 フシ山衣裝 地お谷はそれと詞ヲヽ、こちの人。今仕事から戻りかえ。イ

ヤ〳〵。けふは風が高うて獵もきかず。山は疾う仕舞うたれと戻る道で代官殿から鶴のお觸。お宿老へ呼付けられそれで漸うたつた今。シテ稚兒が樣子はどうぢや。病人を放て置いてどこへ往ためつさうな。イエ〳〵内には隣りのおか樣を頼んで置いて。藥が切れた故醫者殿へ一走り。戻る道で惡者の長太めが。それは〳〵フヽ。あいつがづだい坊には誰も雛儀するげな。イヤその雛儀で思ひ出した。そなたに悅ばすことがある。稚兒が大病人參でなければ助からぬとお醫者の指圖。あつというても長々の煩ひ。そなたやおれが物衣類まで賣代なした上なれば。人參買ふあだてはなしというて大切なは人の命。どうぞま一度本復さしたいと。胸を痛めてゐた所聞きや。稚兒を大事々々と思ふ。二人が念が屆いたやら。よい儲筋を聞出したれば。地人參買ふ工面が出る悅びやと。夫の話に共勇みそれは嬉しい。そしたら私は先へいんで神棚へ燈明上げて。ヲヽそれ〳〵おれは直に其銀の工面に行く。そんなら早う戻つてやと。いふ後から文治々々文治待て。と云ふは誰ぢや。詞イヤおれぢや借錢乞はるゝがいやさに見ぬ顏せうとは横着者。跡月の日切の銀。けさから足の棒になる程往ても。とかく内を外が濱。獵師町で口利く車錢の南兵衞をよう蹴つぶしたなア。これは又南兵衞殿とも覺えぬ。不仕合せ呑込んで借して下さつた日切の銀。片時も早うと心はやたけ。ちつとも如才はャアいふな〳〵。銀戻さぬが如才でないか。戻すあてが無かなぜ借つたと。地いがみかゝれば女房分入り。詞お前樣のが皆尤も。今主のいはるゝ通り。下地の乾いた其上に稚兒が煩ひ。ヤアがつぼしめが病を言立て。又古手な泣言か。豆板程な涙をこぼして。了簡していぬ者もあらうが。此南兵衞なんぼでもいなぬ〳〵。サア今受取ろサア渡せと。地立催促に猶手をすり。詞イヤモ段々の間違ひ。佛の樣な其許も腹が立たいで何とせう。どうぞ長うとは申すまいマア二三日。コリヤコリヤ女房どもあなたへお詫を。地お詫をと上手ごかしに脇道へ。フシ文治は其場をはづし行く。地南兵衞大きにむくりを煮やし。ヤア人にばかり息精張らし。はづさうとは横著者一寸もやらぬ待ちアがれ。ヤイ待ちをれとかけ出す袂にお谷は取付き。詞不躾ぢやと思召せばお腹の立つ筈。あの樣にせかれますも。ちつとなりと精出して早うお銀が上げたさ。堪忍なされてどうぞ主の云はるゝ樣に。詞エヽやかましいべり〳〵とようべる幻妻。よいわ。それ程にいふからは違ふ事もあるまい待つてやろ。其代銀受取るま

で。汝をおれが内へ連れていぬ。エヽそれは。ハテ銀の代りに質に取る。サアうせアがれと 地引立て〳〵情容赦もあら磯の。浪間から又ぬつと。首ばつかりで窺ふ長太斯くと見るよりかけ上り。さうはさせぬと南兵衛が。兩足かいてづでんどう。其間にお谷は引つぱづし逃げて行方は。なかりけり。はふ〳〵の フシめに。起上り。詞テモ強い幻妻め。もう逃げをつたか。地どつちへうせたときよろ付く眼。ヤア投げをつたは汝ぢやな。銀の代りに捕へた奴なぜ逃がしたと。飛びかゝつて長太が弱腰中に提げ振廻し。詞エヽ片手にも足ぬひばり骨締殺さうよりコレかうと。地ぐつと指上げ三段ばかり。遙の沖へざんぶと打込む白浪の。中からによつこりヤイ 詞南兵衛の阿呆よ。海士を浪へ投込んだは汝が手味噌。陸では汝に敵はねど。海の中では千人力。地手竝が見たくば此所へうせいといはれて南兵衛呆れ顏。潮の中から吹出し。詞へヽヽヽちつと怖かろがな。相手にはようなるまい。そこで緩りと業さらせと。地雜言惡口跡しら波。せんかた渚にぢだんだ踏みエヽどんな。詞川童めは川へ放す。銀はえ取らず。地あたぶの惡いとふくれ頬。フシ白砂蹴ちらし立歸る。地夕日浪を洗へば漁の火かと疑はる。ハルフシまだ入相も。ギン遼淺の洲さきにあさる鶴の聲。コハリ窺ひ近寄る簑と笠。邊を見廻し手許を堅め。ナホス切つて放せば拳に手ごたへさしつたりと驅寄つて。詞脛根に着いたる金の札ふつつと捻切り押戴き。驅出す四方を五六人ソレ鶴殺しの曲者。遁すな括れと取卷く磯邊に幸ひの。舟へひらりと飛乘る早速。地陸には術も荒磯の浪を。押切り〳〵て行方。しらず三蹟行末は。陸奥の フシ内にはあれど外が濱。地國の果とて荒磯に。狩漁を業として。本フシ世を押渡る一村の。中にも善知鳥安方とて野山を家と狩りあるく。スエ内は女房のしほたらと。子の煩ひに打ちかゝりオクリ外には何も煎じやう常の如くに缺土瓶。折燒く柴のくすぼりに。フシしんきをもやすかせ世帶。地浦方の年行司用ありさうに門口から。詞文治内にねやるかと 地すつと入れば。是は年行司の庄右衛門樣。詞ようこそお出で。連合はたつた今出られましてござります。地まあお上りと人愛も器量に連れて愛くろし。詞ムヽ御亭は留守か。さらば上つてそ樣のお茶。其煮さつしやるを一ぷくたべうか。イエ〳〵こりや茶ではござんせぬ。こちの息子が傷寒でさん〳〵。それで藥煎じるのでございます。何ぢや小癇ぢや。そりや藥より赤蛙喰はさつしやれ。こちの坊主めは大癇で。樣々の藥呑まし

ても直らず。そこで此庄右衛門様の思ひ付き。赤蛙十疋ばかり喰はしたればつい直つた。大かんでさへぢやに。小かんぐらゐなら四五疋喰はしたらつい直る。イヤそれはさうと。代官様からの廻り狀。御亭が留守ならこなた見て。奥にしつかり判さしやれと。地投出す一通手に取つて。御存じの通り私は文盲。御苦勞ながら讀んで聞かして下さりませ。詞ム、ほんにこなたは無筆ぢやの。地アイ恥しながらと フシ赤らむ顏。詞何の夫が恥しい。娘子供が物書くと彼の思ひ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵候をやりかけをつて。自ら悪性になるというて。親々が教へぬは。遠國の偏屈。其樣に氣を付けても。見んどとはじける時分ははじけをつて 三下り歌 文はやりたし書いたり讀んだりめんどくさいいつそるもりの黒焼のお藥なんどをふりかけて。此庄右衛門樣の思付き。ハ、、、、。詞口叩かずとお觸狀。地讀んで聞かそと押披き。詞ム、何ぢや一つとばかり跡は讀めぬ。高がかうぢや。此國の殿樣八幡太郎樣が。武運長久の爲ぢやというて。鎌倉とやらで鶴を千羽。金の札付けてお放しなされたげな。其鶴が今は此國にも徘徊ずる程に。必ず金の札の付いた鶴を取るなとある毎年のお觸。こりやいはいでも知つての事。聞かつしやれ此四五日以前に。岩城山の麓で。彼の金の札の付いた。鶴を殺した奴があるげな。法度を反いた科人。それで國中は厳しいお尋ね。殊に此浦は殺生人が多いによつて。格別に詮議が强い。若し殺した者があるなら。早速訴へに出い。訴へ人の者には。たとへ親兄弟。夫婦の中でも。其科を赦し。褒美として黄金十枚下されうとある事。これの御亭も殺生好ぢやが。そんな覺えはないかやと。地念を入るればヲ、つがもない。こちの人に限つて何のマアそんな事。必ず氣遣ひなされますな。詞ヲ、そんならよござる。鬼角町には事なかれぢや。ひよつと此村に鶴殺しがあると縛り上げて。京三界まで行かにやならぬ。それがいやさに念入れるは。此庄右衛門樣の思ひ付。地おかた其内來ませうと。しやべり散らして フシ立歸る。お谷は藥。漸うと煎じ了うて枕許。屏風押明けコレ清重。詞今朝から飯も湯もいかず。其樣に喰はずに居ると。醫者殿が呵らしやる。此藥呑んでから。わが身の好の茶粥の中へ。餅入れて焚いた程に。梅干に添へて。地一口くややと母親の。詞に漸う枕を上げ。詞イヤ何にも喰ひたうない。コレ嘆樣とゝ樣はまだ戻らずか。地こゝが術ない〳〵と。教ゆる胸より見る親の。胸を痛めて。フシ手を差入れ。詞ヲ、術ないは道理々々。精出して藥呑んだり飯くふと。此痛みもつい

直ると。地そろ〳〵胸を撫でさする。フシ心づかひの外面より。地外が濱の南兵衛とて。よつ程横へ太つた男。旅行李フシ肩に引つかけ。地亡八の亭主と思しき者。伴うてすつと入り。詞おかた來たぞや〳〵。南兵衛が來たぞやと。地たまからぐわらつくフシ雷聲。地ヲ、これ病人がある聲低にいはんせと。フシ枕屏風を押立つれば。詞何ぢや病人とは。ム、がりまか。なんの役に立たぬやつ。いつそてこねてしまやえいにと。地詞でたんなうさゝぬ氣と。知つてゐてもむつと顔。詞ヲ、南兵衛樣何ぢやいな。また生先ある大事の息子。お前方のお世話にはなるまいし。構うて下さんすな。地エ、いま〳〵しいと捻ちむく姿。詞何と親方見事でござんすか。イヤモごんす所ぢやない。あれがさうなら結構な代物。そんなら道道話した通り。三年切つて金五兩。ヲ、出すとも〳〵。合點なら打ちましよか。しやん〳〵も地指先でおのれ一人がフシ呑込み仕事。詞安い物ぢやぞえ。上方の相場なら。五十兩はぶら〳〵。田舍だけで値打がない。コレおかた。大儀ながらいて貰はうかい。ム、いて貰はうかとはどこへ何しに。ハテ青森の町へ勸め奉公に。イヤコレ南兵衛殿。仇口はいつものの事と。聞流しにして居れば。付上つて出放題あた穢らはしい勤めとは。わしには善知鳥文治と云ふ。歴とした男があるぞや。ハ、、、、歴とした男かして。借つた銀をれつきと戻さぬ。もう催促も仕草臥れた。ぢやによつて汝を賣るのは。高が貸した銀取るのぢや。有難いと思うてきり〳〵いきやいの。但しわしが引立てうかと。地無法無體をとくよりも。戻りかかつて立聞く文治。すつとはいれば悅ぶ女房。詞よう戻つて下さんした。女子一人と侮つて。あの南兵衛がサアよいてや。何もかも聞いて居る。高が五兩か三兩の目腐金に。女房賣らいでも濟む事と。地落付く安方せき立つ南兵衛。詞イヤ厚いな〳〵。わりや身上が厚いか知らぬが。我等ずんど薄うなつて。家主にはぼんまくられ身上有限行李一貫。宿無しとなつたれば。貸した金取らにやならぬ。今というても銀はあるまい。サア親方。連立つていんで銀受取らうと。地お谷が腕引立つる。其手を取つてもぎ放し ソレ銀戻す受取れと。投出す金は金ながら。つひに見なれぬ金の札。ソレ其札は金細工。今潰しても三兩程の金目はある。マアそれなりと當座の質物。ヲ、金にさへなるものなら。受取つてやろうが。三兩ではまだ足らぬ。ホ、其不足も。暮合までには急度濟まさう。ム、暮までなら間もない事。えいわ待つてやらうというて

もぼん無しなりや。いんで居る内がない。暮れるまで爰の内で居催促。コレ五助。大儀ぢやあつた休んで貰はう。ハイ〳〵そんならもうよどざりますか。ヤレ〳〵親方の役もよつ程氣の張るもの。地さらばお暇申さうと フシ立出づれば。お谷は不審。あの傾城屋といふは。詞ヲヽ虚言ぢやかうしてゆすらにや金にならぬ。何とようしたものか。ドレ奥へいて一寢入せう。ぼんまくられて昨日からつがず坊。お方飯が出來たら起して下はれ。雜作ついでに酒も一杯。地のみ取眼のいがみ頬オクリ襖へ押明け奥に入る。フシ跡には思案。あり顔の。夫の傍に差寄つて。詞申しこちの人。今南兵衛にやらしやんしたはありやマア何でござんすと。地問ひかけられてイヤありや此間拾うて來たが。何の役に立たぬ物と思ひの外結構な金の札。あすいる人參代にと思うたれどほんの寶は差合せ。ヲヽそんな物ならあいつにやらずと置いたがよい。今更いふに及ばねど清童の煩ひより。地夫婦が着替はいふに及ばず。諸道具までも賣拂ひ今日迄續けた人參代。もうあすいる人參の代さへ人に渡して了ひ。何の力であの子の本復。見殺しにせうよりは。詞南兵衛がいうたを幸ひ。わしを勤めに賣つてやり其金で人參を。一分なりとたんと入れ。一日も地早うようして下さんせ。賴む〳〵といふ内もスエ涙。呑込む曇り聲。詞アヽやくたいもない事いふ人。コレよう思うても見や。以前は鏈も持たせた身分。浪人したとて魂まで女房賣るほど穢れもせぬ。氣づかひ仕やんな人參代もとうから工面して置いたと。地ずつと立つて膳棚の。隅からおろす硯箱。緣は缺けても放れても昔しみ込む墨の折。ゆがまぬ武士の達筆に。フシさら〳〵と書認め。詞コレお谷。大儀ながら此一通代官所まで持つていきや。アノ此書いた物を代官所へ持つていけとはえ。サア。夫を代官所へ持つて行くと大分の金がくる。ムヽそりや又どうして。サア今戻る道で聞けば鶴を殺した者を訴人すると褒美は黄金十枚との噂。其鶴を殺した者を。わしがよう知つてゐるによつてそれでわがみを訴人にやるのぢや。エイ。お前も日頃の氣に似合はぬ嗜ましやんせ。人の惡事を訴人して褒美に貰うた其金で。どんな藥を呑ましたとて何の利かうぞ本復せうぞ。恐しい事工まずとも。地やつぱり私を勤奉公。親はなし兄弟持たずお前さへ合點なりや誰が點の打人はない。閉分けて下さんせと縋り歎けばはてさて。詞役にも立たぬ事いはずと早ういきや。わしぢやとて人の命何の訴人がしたからう。けれども是ばかりは訴人しても大事な

い奴。ム、大事ないとはそりやまあどこの。イヤ外ではない奥に居るあの南兵衛。エイ。すりやあの南兵衛が。シイ。聲が高い。ほんのこれが厄病の神で祓とやら。ヲヽあいつなら少々こちから金出してなと訴人のしたい惡者。そんならわしは一走いてくる程に。どこもかもようしめて。取逃さぬ樣に 地 して置かしやんせと ギン 小づま引上げいそ〳〵と。ハズミ フシ 代官所へと急ぎ行く。ハルッシ 夫は奥に氣をくばり。そろ〳〵ひらく佛壇の。長地 佛の箔の光さへ簿き檜の花抹香撞木取出したゝき鉦。なまいだ〳〵〳〵 フシ 聲も幽に。詞 とゝ樣やかゝ樣はどこにぢや。こゝが術ない〳〵と。地 苦しむ聲に鉦打止め。詞 ヲヽとゝは笑にゐる。嚊もおつ付け戻るが藥でも呑みたいか。イヤ〳〵藥はいやぢや。コレとゝ樣必ずどこへもいて下さんなや。お前が留守ならおりや淋しい。ヲヽ氣づかひすなどつこへもいきやせぬ。地 〳〵と口にはいへど心には鶴を殺した科故に今縛られて行くとも知らず。我を慕ふ志。可愛の者やいぢらしやと思へば胸も。張りさける フシ 涙。隱してコリヤ清堂。詞 とゝはどこへもいきやせねどな。もし用が有つて代官所から呼びに來ると行かにやならぬ。其時必ず泣くなよ。どうぞ早うまめになつてな。とゝが今看經するは大事のお主。其主の名を覺えて大きう成るまで忘れなよと。地 又佛壇に指向ひ。なむ。俗名安倍の大夫頼時公。詞 家臣鳥海の前司安秀が一子。同苗文治安方。今生にての回向の仕納め。南無阿彌陀佛。〳〵。ア、此殿未だ在世の時は。斯く申す我々まで俱に榮花に誇りしが。地 いかなれば御武運拙く。八幡太郎義家が計略の矢先にかゝり。世を去り給ひし其月日は。詞 ヲヽ、卽ち。今月今日が父頼時の十三回忌。法名大了院殿喜山大居士。出離生死頓證菩提と。地 唱ふる聲に立寄つて。障子開けば南兵衛が。姿は素袍立烏帽子一つの位牌を上座に直し。合掌したる有樣は興さめ。てこそ見えにけれ。地 文治は不思議の膝立直し。詞 頼時公を父上とは心得ぬ今の詞。仔細いかゞと尋ぬれば。ヲヽ不審尤も。合戰の砌まではまだ部屋住の其方。我が面体を見知らぬは理至極。鳥海の。城郭にて人となりし。安倍の三郎宗任と。地 聞くより安方ハヽヽはつと飛びしさり。頭を垂れて平伏す。宗任素袍の威儀繕ひ。只今も申す如く。今日父が忌日に當れば。詞 平人の形で回向申すも云ひがひなく。暫く昔に立歸る我が心は。これより直に都に上り。折を待つて父が仇。八幡太郎義家を討取らんず軍の門出。ハア御尤もなる御思立。猶も御心勵ます一條。地 御父安倍

の頼時公。栗坂の合戰に。討死ありし其時は。詞ホヽ、兄貞任と諸共に。衣川の城内にて。軍の次第逐一に申上げしは我が父前司安秀。地其身も深手老の身の。栗坂より引返し。詞ノリ軍難儀に見え候。早く此城落ち給へ早やとく〳〵と。地勸むる月日はいかなる惡日。天喜五年九月五日。ホヽ、其光陰も三つ羽の征矢。詞流矢來つて我が父の。綿上のはづれより骨を碎いてむづと立つ。地急所の痛手に勇氣もくじけ。遂に其傷で果て給ふ。大將死すれば家の子郎等。親兄弟散々に妻に別れ子をふり捨て。兄貞任の行方まで。しら浪寄する。浦々島々はや。義家が領地となれば。廣い世界に此體。置所さへなつ木立。木にも萱にも油斷せぬ身となり果つる其無念。腦を貫き腸を斷つといへども。ヘエヽ時來らねば十三年。仇に戴く天の咎磐石となつて五體を碎く父の怨。追付け討つて尊靈へ手向の追福仕らんと。初めて明す南兵衛が。氏も系圖も隘奥に竝ぶ方なき。フシ勇氣の大將。詞ハアヽ、適なる御心底其御物語が直に追善喜山大居士安樂國南無阿彌陀佛と地回向の中。表へ誰か人音に先づ暫くと間の襖。さし心得て待つ所へ。斯くとも知らず女房は。褒美の金に氣も勇み。フシ心も足もいそ〳〵と。詞サア〳〵お金貰うて來た。代官樣のおつしやるには。追付け捕手を遣はす程に。先へいんで取逃さぬ樣にせいとの云付。もう此處へ見えるであろ。南兵衛は逃げはせぬか。かういふ中も油斷がならぬ。早う來て。ちやつと縛つて下されいでと地見やる表へ捕手の大勢。門口より大音上げ。詞ノリ岩城山の麓に於て鶴を殺せし大罪人は。此家の主善知鳥安方と。女房が訴人によつて召捕に向うたり。サア尋常に縄かゝれと。地呼ばはる聲に文治安方。詞顯はれし上は隱すに詮なし。お尋ねの鶴殺し縄かけて引かれよと。地夫の覺悟にお谷が悔り。詞コレそりやマア何をいふのぢやいの。鶴殺しは奥にゐるヲヽ南兵衛というたは僞り。そちを訴人にやらうばかり。岩城山の麓にて鶴を殺し。金の札を取つたるは此安方。エイ。すりや今私が持つていた訴狀にも。ヲヽ、自分の科を自分の白狀。そんなら私が無筆故それでだましてやつたのぢやの。ハアはつとばかりに。フシ伏轉び途方。涙にくれけるが。地アヽ、扨も〳〵世の中に。物書かぬ身の上程つらい悲しいものあらうか。連添ふ男の身の科を書き記した物とも知らず。悦び勇み代官所へ持つていたは何事ぞ。せめていろはを讀む程なりと此目が明いてあるならば。何の行かうぞ。無筆と知つてかういふ使に。詞やつたはわしを世の人の。物書かぬ身の見せしめ

になれといふのか文治殿。地そりやあんまり胴慾なむごい難面い心やとスヱ正體。涙に伏し沈む。地夫も不便の涙を拂ひ。詞ホヽ其恨みも尤もながら。何事も定まる業と諦めて。清童を隨分大事にナ。彼の人へ頼み置く事これまで〳〵。サア繩かけて引かれよと。詞に猶豫も捕手の役人。ヲヽ神妙なりと立寄つて。かくる繩目に取り付いてお谷が泣聲清童が。屏風力に延び上り。詞アレとゝ樣が縛られてぢや。詫言して下されと。地いふ聲俱に屏風もばつたり落入る我が子。詞ヤアこれ清童が死ぬわいの。コレ〳〵なうこれと地うろつく女房。繩付ながら夫もうろ〳〵。詞コリヤ清童。必ず死んでくれなよ。われを助けうばつかりに此爻が命を捨つる。コリヤ氣を付けよ清童。清童やい清童いのと地呼べど。叫べど息絶えて。其かひ更に泣倒れ。けふは如何なる日なるぞや。我が子に離れ夫に別れ。一人殘つてそもやそもあられうものか淺ましやと。妻が歎けば夫は猶。涙にむせぶ聲を上げ。詞四百四病の煩ひより貧程つらいものがあらうか。我が子に呑ます人參の價にせんと鶴を擊ち。其鶴故に我が命取らるゝのみか子も死ぬる。思へば是まで多くの殺生。數多の鳥を殺す中にもまだ巣離もせぬ小鳥を。育てん爲に親鳥の野山におりて餌を尋ぬる。それとも知らず親鳥を殺せば殘りし子鳥も死ぬる。まづ其如く我我も子を助けんとて此親が。死ぬれば殘りし子も死ぬるは歴然報ふ因果の道理。親故不便な死をさすか。堪へてくれ赦してくれ。父も追付行く程に。六道の辻で必ず待つて居てくれよと。地後や枕に取付いて。夫婦は前後フシ正體も取亂。したるばかりなり。地捕手は哀よそ目に見なし。詞ヤア未練の歎きに時移ると。地立寄つて引立つれば。是非も繩目に恥ぢしめられ。フシしを〳〵として立上る。コレなう暫しと女房が。寄るを突退け縋るを拂ひ。前後嚴しく取りまく人數。詞ヤアお役人先づ待つた。鶴殺しの科人は是に在り人違ばしせらるゝなと。地聲をかけて南兵衛が一間を出づれば捕手の頭。詞ヤア自分の白狀によつて繩かけし善知鳥安方。其外の科人とは紛はしき胡亂者。但し鶴を殺したる證據あつてか何と〳〵。ヲヽ證據は則ちこれ爰にと。地投出したる金の札。詞鶴が岡の神前に於て。八幡太郎是を放つと彫り付けし金の札。その札を所持するからは紛れもない鶴殺し。科ない者を縛らずとも繩といて某を。早く都へ引かれよと。地思ひがけなき一言を。聞くより文治氣を苛ち。詞ヤアいはれぬ我を庇ひ立。證據があらうがあるまいが科人は此文治。イヤサ證據

が有れば鶴殺しは此南兵衛。イヤ某と。地 爭ふ二人を制する捕手。詞 慥なる證據有れば科人は南兵衛に極る。此上は善知鳥が縛。地 はやと〳〵と南兵衛に。かけ替つたる縛り繩。地 ヤアいつまでも此文治家來の代りに御主人と。いふを打消しコリヤ〳〵。詞 鶴殺しとなつて都へ引かれ。八幡太郎に見參せばそれこそ日頃の願成就。ナ。地 合點かと目まぜにはつと心付き。詞 すりや御所存有つてホヽ。會稽は今此時。イヤ〳〵それは無用の振舞。たとへ再會の期はあるとも身動きならぬ其縛。何の是しき。たとへ鐵の鎖を以て繫ぐとも。我が爲には藁しべ同然。一念頭にとゞまつて本意を遂げし眉間尺。口に劍は含まずとも。一心の寢刃を合さば何條事のあるべきぞ。地 ナ心得たるか安方と。身を鐵石に固めたる詞に善知鳥も詮方なく。詞 たとへ繩目は助つても。存命ならずと肌くつろげ。山刀拔放せば。こはそもいかゞと止むる女房。南兵衛聲かけヤア何故の切腹。詞 仔細ばしあつての事かと問ひかけられて。フシ 涙を流し。詞 今は何をか包み申さん。只今死せし悴と申すは我々夫婦が子にあらず。三代相思の御主人より預りし大事の和子。御大病の介抱も心に任せぬ身貧の某。此後主人にめぐり逢はゞ何と言譯有るべきぞ。地 只切腹を御容赦とおつ取る刀踏落し。詞 ヤアうろたへたるたはけ者。たとへ我が兄。ナそれわれが兄の子。名は千代童子といふにもせよ定まる命は力及ばぬ。一人にても味方を招く今此時。犬死して忠義になるか。スリヤ死ぬるにも死なれぬ命。ヲヽまさかの時まで汝に預ける。いざお役人御苦勞ながらと。地 勇む繩付しをるゝ善知鳥。妻は泣く〳〵野邊送り。何營みも亡骸は。子で子にあらぬ郭公。泣く聲をはつて血を吐く鳥親も。傍にて血の涙。ふらせばお谷がすが糞や。ダ、キカヽリ 死骸を覆ふ。フシ 隱れ笠隱れあらざる弓取の。其御崩ともお主ともいふにいはれぬ苦しさは。鴛鴦を殺せし科やらん。善知鳥は却つて生殘り我は擒となつたるも敵を欺く氣の大鳥。追付け天下に羽うつ鳥。數々鳥の報いを受に。陸奥の外が濱なる善知鳥の宮。安方町と名も高き古跡は。今に殘りける

第三

歌念佛 されば にや少將は。百夜通へとゆふ闇の。笠にふる雪つもる雪戀の。重荷朱雀道。七條堤の假橋に。ナホス フシ 盲女の彈語り。襤褸の中の秘藏娘。十ばかりなが手を出して。右や左の道通り。サハリ 西は九州薩摩潟鬼界が島の果までも。わしや行く氣ぢやにさりとては。花の都に

袖乞とェェなりて住むこそ。フシ是非なけれ。地王城の地は物貰ひも繻襟さつぱりフシ月代天窓。詞どうぢや盲のお袖。よい貰ひがあるさうなの。ヲ、かさの次郎殿か。今夜は閨で人通りは少なし。北風は吹付ける手がはぢかんで。三味線も彈かれるこつちやない。何を贅らしい。寒の中に凉むのがわがみの渡世ぢやないかいの。がりまは居睡やせんかよ。商賣に凡な奴ではある。ヲ、イどいつぢや。ム、とんとこの九助今仕舞うたか。儲けるな〳〵。イヤ〳〵。とんとこも初手は取つたもんぢやが。先繰に新物が出てとんと衰微。もう今は町中がお長めに喰付き切つた。まだどういうても角を絶さぬ奴は佐野の源左衛門。あいつは株ぢや。したがわりや。よい儲けがあるかして。見りや立派な産をかぶつて。派手な形するな。アヘ、。いやもうこいつも冷たうて悪い物やい。ほんの見てくればつかりぢやわい。色取るな〳〵。ホ、、、、。ほんにそれも一盛。此方は此子一人が樂しみ。去年までは相應に一重の物でも縫うて着せたが。此春から内障になり。俄盲で。娘に介抱受ける身の上。行先を思ひ廻せば夜の目も合はず。今日はお君が誕生日。こんな中でも大事の身祝ひ。こな様方にも祝うて貰をと。酒も小屋に買うて置いた。したがあの六殿にはさたなしぢやぞや。ヲ、あいつに呑ましたら一升や二升はついころりと。地人事いはゞ筵まで。呑上げる非人の六。諸方の滑に目は据りふくり返つた腹立上戸。詞けたいぢやぞ幻妻の傍にべら〳〵とおけよ。又六めはえらう引いてうせたな。あいつはえい得意を持ちをつて濱脇の料理茶屋で。酒肴の喰飽しをる。サ、それがけたいぢや。おりや業がわいてならんわい。けふも川作の屋敷振舞喰て來たが。惣體近年茶屋方の料理が粹過ぎておれが口に合はぬ。それで腹が立つが無理か。そいで大道掃けの犬追へのと。下男か何ぞの様につかひくさる。これではもう乞食もやめにやならぬ。コリヤお君よ。をぢが風車買うてやろがえらいか。おりやもうわれが可愛いて〳〵腹が立つわい。ヲ、もうこちの娘が可愛いのが何の腹の立つ事で。腹が立たいぢや。コレおめく。一體おりやわがみの器量のえいのが腹が立つ。乞食だてらそんな美しい顏が。どこにあるものぢや。無理か。無理ならどいつでも相手ぢやと。地くだまく聲もフシ酒くさ原。地踏分け來る瓜割四郎。ソレ。今のお侍様ハアと二人が。大蹲ひ。詞非人共か最前言つた生駒之助。傾成戀絹取逃したか。何と〳〵。サア申し。晝ちよつと頃張りましたれど。先もざぶなりや滅相にはかゝら

れず。ヤ幸ひ爰におる六といふやつは酒くらふと阿呆力。こいつに仕事さしませう。コリヤ六よこゝへこい。又粗略な膳投出して辭儀しをれやい。いやぢやおりや茶屋の料理人より外に腰屈めた事がない。イヤサよう聞け。其二人のやつおいらが往てぐづりかけて爰へおこすは。われが爰に待伏して居て。男めをぶちのめす。そこで幻妻をあなたへ渡すと。御褒美にきすは存分。あなたの振舞呑込んだか。ム、酒呑ますか。嘘ぢやないかよ。コレ殿様。そんならマア酒の方を先へせうかい。イヤ〳〵〳〵。あの上呑ますと本たはいになります。ヲ、サコリヤ六とやら。仕畢せた跡では呑喰ひはわが望み次第。酒は伊丹の鷹かぶりヲツト差合言ひはるな。ム、こりや鹿相。肴は鰒汁。それも差合。鰒はおれが同行中ぢやと。地横にふくれた腹鼓 フシ咽をならして別れ行く。地もう人通りもなささうな。仕舞うて休もサアお君と。ダ、キ親子かたへの小屋の中。鳥の ナホス フシふしどと隣同士。露を荷ひし。 ギン乗物釣らせ。源家の妹八重幡姫。こなたの土手を眞直に。平傳枕直方互に。行き合ふ提燈の紋に見知りの一家中。詞是は〳〵八重幡殿夜中に何國へ。ちと心願の事あつて。ム、神詣か。徒歩づから殊勝々々と フシ挨拶半ば。地生駒之助は戀絹が手を引き漸う火影を目宛。狼藉者に出合ひ難儀致す。憚りながら此女を。暫しが間お預りと。地差出す提燈ハツト恠り逃行くを。傳杖目早くコリヤ〳〵若者。詞わりや道に迷うたな。此處は京京中が暗いから。人の誠の本海道は行かずして。色々の道に迷うて居るな。ソレ火を借つてとつくりと。心の闇を見たり見せたり。身どもは老人猶以て何にも見えぬ。よし見えても。八重幡殿とは一家の中。急ぎの用事早や參ると外す老巧 地粋親仁。妙下部さし心得。一人も殘らず フシばら〳〵と。地氣を通されても濟まぬ中。わざと殿勤三つ指に。詞先づ以て姫君様。御安泰の尊顔を拜し恐悦至極と相述ぶる。地ヲ、さういひやるは無理ならず。詞したがもう其様に氣を置いて下さんな。わしやふつつりと思ひ諦め心の髪は切つて居る。ハテ思ひ合つた中を引分け添うて何の本望。殊に兄上のお媒遊した戀絹殿。中よう添うて其代り。地未來の緣を。詞コレどうぞ頼みまする夫婦の衆と。思ひ切つては中々に見向もやらぬ。フシ心根に。地戀絹も恥入つて。詞勿體ない〳〵。それを聞いては私が方から。思ひ切るとも申されぬは。地ひよんな物を身にやどし。退くにも退かれぬ惡緣。詞そんなら御詞にあまえて。お大事の物なれど此世は私が借分。來世では

きつとお返し申しまする其證據。ちよつと爰で御祝言のお盃がさせましたいが。地アヽどうがなと案ずれば。詞そのお盃私が差上げましよと。フシ小屋の簾を。押上げて。オクリさぐる。目病のフシすり足に。緣も缺けたる三寶土器の。長地襤褸の上の綱襠はやれても昔ゆかしげに。詞どなたかは存じませぬが。最前から御尤もなせつない戀のお咄。私も仔細あつて夫に飽かぬ別れをせし者。身に引當てておいとしぼく。襤褸の袖を絞りしぞや。詞かやうに申さば賤しいきたない非人めが。穢らはしいとも思さうが。私とてもまんざら。前からかうした身でもござりませぬ。今日は此ちひさいやつが誕生日。昔を思ひ出して調へし九獻賢斗昆布。心ばかりの身祝ひ。地幸ひの折からと慮外を忘れたお媒。サアお君敎へて置いた祝言の長柄地お酌申しやと挨拶に。姫君嬉しく盃の。底意晴れたる取結び。さいつさゝれつ酌みかはす。地待伏したる非人の六。酒の匂ひをかぐよりも。以前の仕込は忘れて仕舞ひ。ほや〳〵笑顏もみ手して。詞へヽヽヽホヽヽヽお目出たい御祝言。私もお取持にちつとお聞。地お酌これへとかけ茶碗。息なしに呑ごく〳〵。ホウ。詞結構なお酒でござりまする。ハヽヽヽ。且那慮外申しまする。者は爰に有山の。地面桶の底から鮪の足。詞イヤ過分なが身は精進。そんなら私祝うても一つ下さりましよ。お家樣。上げましよか。おいやか。そんならも一つ下さりましよ。御寮人樣もおいやか。そんなら我等も一つとフシほつとする程續け呑み。地戀絹が代つてお酌イヤ〳〵申し。詞見苦しくともやつぱりあれに。娘が生長あなた方にあやかり。よい殿御持つて祝言をホヽヽヽ。わたしとしたことが。非人乞食の身の上で。何の祝言どころと嘸お笑ひなされう。思へば〳〵淺ましい身の上。ハ是はしたり。大事の目出たい御祝言につい涙が。私も祝うて謠君は千代ませ〳〵と。ナホスくり言を祝ひ歌の。フシ面白の時代や。詞おめでたや〳〵。祝ふにつけて我が娘も。昔の身ならお乳めのと。地積松十炷香蓊づくし敎へも覺えもせうものを。ろくな事でも敎へるか。橘の上の乞食の娘。詞誰が嫁にも取つてくれう。地侍の胤を受けながら。町人百姓にも緣付の。ならぬは何のフシ報いぞと昔を。忍ぶ悔泣。地身につまされてフシ三人もいとしや道理と俱涙。地六も數獻の持ちこしに。貴ひ涙のかい作り。詞どうやら酒が理に入つて。おれも悲しい。地〳〵としやくり上げたる折からに。かけ來る次郎七九助。コリヤ〳〵六何して居る。きり〳〵しかけて

墨んでしまへ。後詰にはおいらがゐる早う〳〵とせり立つれば。地泣いじやくり。詞次郎七か九助か。エヽわいらはえい機嫌ぢやな。おりやさつきにから哀れな咽を聞いて。泣いてばつかり居るわいやい。わいらもアレ。あなた方の形を見い。雛様のやうなお姫様が酒買ふ錢がないやら。乞食に酒を振舞はれ。せめて天目でもある事か。嚙み割る様な盃に。酒ならたつた一升であやまつてござる心根が。思ひやられておいとしいとフシ涙と。俱に又どぶ〳〵。詞エヽいま〳〵しい又喰うたな。地其酒こちへとたくりにかゝればイヤ〳〵。詞それから御實じませう。どなたでもどいつでも。且那衆に手向ふやつらおれが相手。フシ尻引つからげ圍うたり。詞どつこいやらぬは乞食に差合。貰うてこませと兩方から。地取付く襤褸の破れかぶれ。うぬらは世界の餘り物。命の高はげんこ取り。ころ〳〵轉び逃行くを キホヒ フシ酒に任せて追うて行く。地向ふに數多の人音は申し〳〵。詞今の侍が來るので有らう。ちつとの間私が小屋へと オクリ 二人を伴ひ入る間もなく。血眼になつて瓜割四郎。どつちへうせたと フシ家來もしどろ。地しばし〳〵と傳杖直方。詞コレサ四郎慌しい面色。先づ何を詮議めさるゝと。地尋ねられて。詞イヤ。何其儀は。貴公も此程御吟味なさるゝ。宮を奪ひし曲者。草を分つて詮議せよと主人が云付け。ヤ姫君もこれにお渡り。此小屋が物くさいソレ家來どもナイ〳〵〳〵。非人め出ませい出をらうと。地呼ばれておづ〳〵。フシ遣出づる。詞つゝと出をらう。ハイ。まだ出をらう。ハイ。頬上げいと 地突付ける。箱提燈の火明りは。老眼にも見違へぬ。絶えて久しき我が娘。ハツ〳〵とばかりフシ仰天。ながら聲をくろめ。詞ム、此小屋の非人は汝か。ハテ非人ぢやよな汝もよもや腹からの乞食とも見えぬ。町人か但しは武士の娘か。ハイ。御推量の通り成下つたは若氣の誤り。清水詣の折から。東國方の浪人と不圖馴初め嵐を宿として是非なき家出。其夫にもあふぎの別れ。ホイ。はてな。ヤアくど〳〵云ふ手間で。うぬが親夫の名をぬかせ。ハイ。そればつかりはどうもなぜん〳〵。名を申すほど不孝の上塗。此身こそかう成つたれ。親の名は出すまいと。畳は袖乞も得致さぬは。せめてもの申譯。ヲヽ尤もさうあらう。今の其心底を。誠の親が聞くならばと 地我が名は言はぬけんじやう向き。千々にフシ心ぞこもりける。詞ヤアいよ〳〵以て胡亂者。まだ隱してあるやつがあらう。直に詮議と 地立寄る鑑しつかと取つてお待ちやれ四郎。詞宮を奪ひしやつの詮議お身は賴

まぬ身どもがする。横合からいつかい世話。但し老人で斯樣の吟味も得せまいと思うてか推參。至極ときめ付けられ。アヽこれ〳〵〳〵眞平御赦免。いやもう拙者も御一門の家來なれば。只今のは御心安だて。イヤ姫君にももうお立ちお供廻りはどつちへうせた フシ參れ〳〵と脇道へ。詞ホンニそれ〳〵自らも。夜の更けぬ内歸るがよかろ。此間にちやつと地行くがよかろと知らせの謎。フシお袖が小屋の後から。押しやる主從妹背の別れ。親子の別れは子は知らで親の フシ思ひの闇深き。地傳仗が郎等あわたゞしく。詞只今大江維時公より。宮の御詮議何故に遲なはる。日延の畸刻も一日に迫る。尋ね出すか切腹あるか二つ一つの御返事あるべしとの御事なり。ナニ維時が使とな。直に逢ひて返答せん。供せよ彌惣太。提燈持てと コハリゆふ嵐。ナホス地鐘もときつく八重幡姫。詞傳仗樣の一大事。アヽ氣遣はしや。家來ども乘物參れと。フシ呼ばはる聲。地お袖が聞付け申し〳〵。詞傳仗樣とは平傳仗。直方樣ではござりませぬか。イヤそれ聞いて何にする。ヤア。そんなら今のが。コレ申し。一大事。とは何の譯。ちよつと聞かしてヤア面倒なと突飛ばし。地乘物急げと四郎が逸散。慈悲も。しら砂ころ〳〵〳〵。ころぶ蘆邊の濱千鳥 フシ嵐に髪もばら〳〵〳〵。親子手を取り雪の足跡を。慕うて 三更辿り行く。地心の内こそ哀れなれ。平傳仗直方。環の宮の御行方知らぬ筑紫のほとゝぎす。夏去り冬のいつしかに。スエテ既に今年の日の數も。ホフシ春待つばかり枯殘り。地枯果つる庭の檜皮ぶき落葉の軒と茸變へて。長地殿守の女中仕丁もなく。老の忠義の一筋に。竹の園生の傳も。つもる白髪に雪折れて オタリ妻の濱ゆふ只二人詞夫婦の人なん。フシいまそかりける。地緣先に立出で。詞なう殿。お年寄の雪降りに。庭へ出て何なさるゝ。寒氣が入らうにもうおはいり。地ちと火にお寄りと切炭の尉になるまで。フシ女夫合。サレバ〳〵。宮樣行方なくなり給へば。此御所は明屋敷。我々夫婦が斯樣に御番は致せども。肝心の主なければ。玉の御殿も鳥の塒と成果て。地今日なども宮おはしますならば。仕丁共に木の葉の雪を拂はせて。御遊びなされうものをと。ふと思ひ出して子供の眞似する雪なぶり。詞天地の中にさへましまさば。奪ひ返して此恥辱雪がんものと。心は雲にも入りたれど。地都の中を身動きならねば。空しく胸を煎るばかり。詞不便なは娘敷妙。日本の智者と呼ばるゝ。八幡殿に連添ひながら。不覺を取つた此親故。夫の手前も恥しく。地嘸肩身がすぼらうとそも此春よ

り一夜さも。實に寢た夜はおぢやらぬと フシ奥齒。もれくるまばら聲。詞ア、よごさりますわいの。弓取の不覺といふは軍の中の臆病。こりやほんの災難。敷妙が事仰しやるに付けて。思ひ出すは姉娘の袖萩。親にも知らさず忍び男を拵へての家出。憎い奴と思うたも早や一昔。地其時はまだ十六の跡先なし。年もいたれば嘸今頃は。悔しう思うてゐるであろ。どこにうろたへて居る事ぞ。詞エ、又姉めが事ぐど〳〵と。思ひ出すも穢はしい。不孝者といはうか。武士の家の不義放埒。再び頼も見まじと思ひしに。まだ業が滿てぬやら。地朱雀堤の橋の上で。詞エ、橋の上で何としたえ。サアいや何ともせぬ。たとへ橋の上で。のたれ死しをらうが。不便なとも思はぬ。お身は又何とぞ思ふ氣か。イヽエ。何とも存じませぬ。ヲヽ身どもは結局。心地よく思ふわいと。地口は憎てい身を背け物事包まぬ夫婦中涙。フシ一つは隱し合ふ。地腰元どもが取次の間。敷妙様御出と。フシ娘ながらも案内は。武家の行儀の表門さすが親子の フシ中座敷。詞ヲヽ、此頃は便もなし。心地でも惡しいかと傳使殿も案じてぢやに。ようおぢやつたサア〳〵爰へ。テモ美しう髪結やつたと地子供の様に。フシ思ふは母。詞イヤ申し。今日參つたはお見舞ではない。傳使様へ。夫八幡太郎義家が使者でございます。ムヽ。ハテ變つた。表向の用事ならば家來は越さで。そなたを使者とはコレ〳〵奥だまりやれ。何にもせよ使者とあれば。娘は内證。いざ御使者。御口上の趣フシ承はらんとありければ。義家申越す仔細。環の宮お行方なき事。御傳の傳使殿誤り。據なし。日延の日數も今日限り。若しも言譯なきに於ては。罪を糺す義家が役。聟舅の容赦は致さず。勅諚を以て取圍み。敵味方となり申さん。其時必ず遺恨にばし思されな。其爲申し遣はす。使者の口上あら〳〵地斯くの通りでございんすと語る中より傳使直方。いそ〳〵立つて一間の内。柳箱に飾つたる箒と思しく携へ出で。詞扨々八幡殿は天晴仁ある大將かな。元來某は平家。八幡殿は源氏。聟舅となるは稀なる事と。そちを嫁らした其時より。聟引出に赤旗一流遣はし。八幡殿より此白旗一流。取換て所持せしは。兩家合體の其印。地此度の我が誤りに就いては言ひがひなき舅。よしなき緣を組みしよと思はれんは必定。大方娘と緣切つて。此旗を取戻しに來るであらう。若し去られたら其思ひはいかばかり詞どうぞ此白旗のやはり此家に止る様にと。此頃神前に飾り置き毎日祈るかひあつて。今日娘を表向の使者として。差越されし八

幡殿の心底。たとへ聟男。敵味方になるとても。敷妙は去らぬとある情の謎。地老人が心を察し心遣ひの御親切。逢うて禮も言はれぬ義理。詞お使者歸つて申されうは。仰せ越さるゝ趣一々承知仕る。委細の心底は對面の上申聞けん。お出を待つと傳へられよ。お使者大儀と地式禮も弓矢の面裏門口。詞八幡太郎參上と地白衣ながらに入り給へば。コハいつの間にと敷妙も不審立ちそに立つ母親。此頃絶えし一家の參會フシお茶よお菓子と賑賑し。地直方邊に目をくばり。懷中より一通取出し。詞親しい中にも胸中を量りかね。今日までは聟殿にも包みしが。宮の御行方尋ぬべき。手がかりといふは此狀。契約の如く環の宮を密に盗出しくれよと。匣の内侍へ頼みの文體。名は誰ともなけれども。必定安倍の頼時が餘類。貞任宗任兄弟の族。奪取つて儕等が味方を集むる柱にせん爲。さあれば御命に別條なしと。心の安堵はしながらも。地言譯立たぬ身の越度。我が心を推量あれ。詞ホヽウさそこ〳〵。我が推察もその如く。此程奥州より捕へ來る鶴殺しの科人。面魂尋常ならず。肩口に二つの痣。これぞ兼て聞及ぶ目印。疑ひもなく安倍宗任一人は手に入れしが。今一人の兄貞任。此兩人さへ捕へなば宮の行方明白たらんと。則ち彼の宗任を此館へ引かせ來る。地禁廷の御沙汰なき中に。詮議肝要たるべしと力をフシ付くる時しもあれ。詞桂中納言樣御出なりと知らすれば。ソレ氣遺ひ私の内意か勅諚か。女儀は次へと改むる。地座席に心殘れども フシ母と娘は立つて行く。地中納言教氏卿衣冠の袂に薫りくる。フシ雪より出でて雪より白き白梅一枝。フシ小四方に取乘せ持參あり。詞謙仗には此間。公の御不審蒙り無心を痛められん。鬱氣を晴す此梅。まだ冬籠りの枝ながら進上申す。地此花と諸共喜悦の眉を開かれよと直方が前に差出し。詞義家朝臣のおはするも彼の詮議の一條ならん。殊更親しき一家の中御心底察し入る。地コハ卿の御詞とも覺えず。詞一家は一家政道に依怙なき義家詮議の手がかりになるべき科人。先達て捕へ置く。ヤア〳〵義家が家來ども。鶴殺しをこれへ引けと。地呼ばはり給ふ一聲に鶴の科人出でをらうと。權威の下部は蠅蟲と見下し。破布子の繩付ながら。眼中威勢備はつて。實に大將と大將の。フシ見參とこそ見えにけれ。詞鶴を擊つたる科人。外が濱の南兵衛とは假の名。奥州の住人。安倍の頼時が次男宗任ともいはるゝ勇士。それ程のへろ〳〵の繩引切るは易かるべきに。わざと下部に引出さるゝは。義家に鬱憤を言はんず爲な。聞いて得さ

せん。サア何と語れ。フシいかにとの給へば。詞是は又思ひがけもない。そんなむづかしい名は生れてから聞いた事もござりませぬ。博奕打の南兵衛に違ひなければ固よりお前様に勿體ない。鬱憤とやら一分とやら。半銭もかけ値は申しませぬ。兎角命が惜しいばつかり。どうぞお慈悲に縄解いて。お助けなされて地下さりませと泣かぬフシばかりのしら〳〵しさ。詞ム、然らば汝産の匹夫下郎に違ひないな。コリヤ此旗を見知つてをるか。是こそ我が父伊豫守。奥州追伐の折から。押立て給ひし白旗。其時宗任が親安倍頼時。大将目がけ放ちし矢先。狙ひはづれて此旗に受けとめ。即時に踏折り捨てられし。其矢の根はコレ此所に。ハヽヽヽハ。頼時づれが拙き運にて。源氏に敵對叶はぬ事。今にも其餘類あらば却つて敵の此矢を以て。斯くの通りと丁ど打つ。地鏃は庭の手水鉢じろりと見やつてこれは扨。あぶない事をと。フシそらさぬ顔。地教氏卿進出で。詞よし手練はともあれたとへ眞の宗任なりとも。匹夫下郎に等しき男。大望の企て思ひもよらず。奥州の果に生れ。草木の名も知らぬ鹿猿同然の族。地かくいふが無念ならばコレこの花の名を知つつるかと。白梅取つて差出し。詞東夷の目にはよも知るまじ。知つたならば地いうて見よやとフシ嘲弄ある。地宗任ぐつとせき上げ。詞南兵衛といふ下郎でござれば。花の名はいかにも存ぜぬ。併し。さうおつしやる教氏卿も。以前は流し者に逢うて配所の島守。漸う此頃召還され。冠装束かけたればとて。正眞の山猿の冠。相手になる口は持たぬ。身が返答はコレかうと。地傍に立つたる件の矢の根口に銜へて我と我が。肩口つんざく血汐の紅。何かはあやも白旗に鏃の筆のさら〳〵と。文字鮮かに染めなすは。東夷の名にも似ぬ三十一文字の言の葉に。座もしら梅の枝折りて。冠傾き。見えけるが。詞ム、詞爭ひ無益しと。和歌を以ての返答。我が國の梅の花とは見たれども。大宮人は如何いふらん。地面白し〳〵。我に歌を詠みかけしは。返歌せよとの事ならんさりながら。最前汝がいふ如く。詞此教氏は父の卿諸共。幼少より島へ赴き。副に育ちし恥しさ。雲の上に座を列ねながら。我さへもえ詠まぬ歌を。かく即席に詠みかなへし器量骨柄。問ふに及ばず安倍の宗任に違ひなし。いはれぬ歌で蛙は口から。我と我が手に白狀せし。地淺はかさよと一言に勝色見する梅花の頓智。術に乘りし無念の宗任。口にくはへし鏃の手裏劍。大將目がけ打返すを丁ど留めたる源氏の白梅。詞ホヽウ尤もかうこそあるべけれ。地生捕るも捕らるゝも

時の運命恥とな思ひそ。猶此上に義家が。尋ね問ふべき仔細あり。こなたへ引けと引立てさせ フシ奥の間。さして入り給ふ。地 敎氏邊を打眺め。傳仗が傍近く。詞さて〳〵心づかひ察し申す。未だ言譯の筋もあらざるや。ハツアそれ故にこそ。地 心を痛め罷在る。詞ホヽさこそあらんそれに就き今日貴殿に。志したる此梅は。まだ寒中に。室にて溫め咲かせし花。地 天の自然にあらねども。春を待ち得て咲く花より。早き眺めを人の賞翫。詞 又散る時も其通り。しぼみかゞけて見苦しうならぬ先に。此枝の如くさつぱりと。切れば却つて香も深し。花に限らず身にも亦。切る時が大事。地 左樣には思はれずや。詞ムヽ御心深き此一品。地 散りかゝつたる老の枝。切れと賜はる天の賜。花物いはねど御謎に白梅の腹切刀。慥に落手仕る。詞ヲヽ天晴明察。大江維時なんどいふ。謎者の嵐に吹散されぬ其先に。花は三吉野人は武士。名を後の世に散さぬ樣の 地 思案ぞあらまほしけれと。梅に詞匂はせてしづ〳〵へ立つて入りにける。たゞさへ曇る雪空に。心の闇の暮近く。一間に直す白梅も無常を急ぐ冬の風。身に徹ゆるは。フシ 血筋の緣。不便やお袖はとぼ〳〵と親の大事と聞くつらさ。娘お君に手を引かれ親は子を杖子は親を。走らんとすれど。雪道に フシ力なく〳〵辿り來て。地 垣の外面に。ア、嬉しや。詞 誰も見咎めはせなんだの。イヽエ門口に侍衆が。居睡つて居やしやつた間に。ヲヽ賢い子ぢや。傳仗樣は此春から主のお屋敷にはどざらず。此宮樣の御所にと聞いて。どうやらかうやら爰まで來ることは來たけれど。地 御勘當の父上母樣。殊に淺ましい此形で。誰が取次いでくれる者もあるまい。お目にかゝつて御離儀の樣子が何卒聞きたやと。探ればさはる小柴垣。詞ムヽこゝはお庭先の枝折門。戸を叩くにも叩かれぬ不孝の報い。此垣一重が鐵の。地 門より高う心から。泣く聲さへも憚りて簀戸に。フシ喧付き泣き居たり。地 傳仗は斯うとも知らず。詞 垣の外に誰やら人聲。アレ女どもは居らぬかと。地 言ひつゝ自身庭の面。外にはそれと懷かしさ。恥かしさも亦先立つて。掩ふ袖萩しらぬ父。開けて惘り戸をびつしやり。何の御用と腰元ども フシ濱ゆふも庭に立出で。詞 傳仗殿何ぞいの。イヤ何でもない。見苦しいやつがうせをつて。腰元ども追出せ。婆。あんな物見るものでない。こつちへ 地 お來やれ〳〵夫の詞は氣も付かず。何をきよと〳〵といはつしやる。詞 犬でも入りましたかと。地 何心なく戸を開けてよく〳〵すかせば娘の袖萩。はつと呆れて又ばつたり。娘は聲を聞知れど母樣か

とも得も言はず。母は變りし形を見て胸一杯に塞がる思ひ。押下げ〳〵。詞定めない世といひながら。テモ扨も〳〵〳〵思ひがけもない。コレ〳〵婆何いやる。イヤさあ矢張犬でござんした。ほんに憎い犬め。親に背いた天罰で目も潰れたな。神佛にも見離され。定めて世に落果てをらうとは思うたれど。これは又餘りきつい落果てやう。今思ひ知りをつたかと。地餘所に知らすも涙聲。様子知らねば腰元ども。詞さつても慮外な。物貰ひなら中間衆には貰はいで。お庭先へむさくろしい。地とつとと出やとせり立てられ。詞ハイ〳〵。どうぞ御了簡なされてまちつとの間。地ハテしつこいと女中の口々。詞ヤレ待つてくれ女子ども。詞ヤイ物貰ひ。お錢が欲しくばなぜ歌を謡はぬぞ。願ひの筋も何なりと。地謡うて聞かせと夫の手前。ちつとの間なと際入れたさ。あいとはいへど袖萩が。久しぶりの母の前。琴の組とは引きかへて。露命を繋ぐ古絃に。スエ皮も破れし三味線の。ばちも慮外も顧ずお願ひ申し奉る。歌今の。憂身の。恥しさ。父上や母様のお氣に背きし報いにて。二世の夫にも。引別れ。泣き潰したる。目なし鳥。二人が中のコレ。このお君とて。明けて漸う十一の。子を持つて知る。親の恩。知らぬ祖父様祖母様を。慕ふ此子が。いぢらしさ。不便とおぼし。給はれと ナホス スエ跡謡ひさし。フシせき入る娘。地孫と聞くより濱ゆふが飛立つばかり戸の透間。抱入れたさ縋りたさ。祖父も變らぬ逢ひたさを。隠してわざと尖聲。詞ヤア喧しい小唄聞きたうない。女どもも奥へいて。お客人

寅暦十三年正月姪子屋吉郎兵衛座興行の番付

に付いて居よ皆いけ〳〵。コレサばゝ。何うぢ〳〵。早く畜生めを擲出して仕舞やれさ。アヽコレ。腹立は尤もなれどそれはあんまり。ハテさておばゝ。隙入る程爲にならぬ。武士の家で不義した女郎。擲出すとはまだ親の慈悲。長居せばぶち放さうか。親の恥を思うて。名を包むはまだしもと思ひの外。今となつて身の置所がなさの詫言。恥面も構はずよくうせた。但しは親へ頼當に。わざと其形を見せにうせたか。地につくいやつと怒りの聲。袖萩悲しさやる方なく。なんの〳〵誓文。勿體ないさりながら。詞さう思召すも御尤も。大恩を忘れた淫奔。我が身ながら愛想の。盡きた此體。お詫申したとてお聞入れが何のあろ。そりや思ひ切つてをりまする。お屋敷の軒までも來られる身ではなけれども。地お命にかかる一大事と聞いて心も心ならず。顔押拭うて參りました。詞不孝の罰で目は潰れる。此子を連れて此處の軒では追立てられ。彼處の橋ではぶち擲かるゝ憂目に逢うても。此身の罪に較ぶれば。まだ業の果し樣が足らぬと。未來が猶しも恐ろしい。地此上のお願ひには。娘のお君お目見えと申すは慮外。只の非人の子と思召したつた一言お詞を。おかけなされて下されと。スエテ歎けばお君も手を合せ。詞申し旦那樣奥樣。外に願ひはござりませぬ。お慈悲に一言ものおつしやつて。地下さりませと言馴れし。袖乞詞に濱ゆふが可愛やな。子心にさへ身を恥ぢて祖父樣ともばゝ樣とも。え言はぬ樣にしをつたは皆汝が淫奔故。畜生の樣な腹から見事犬猫も産みをらず。生れ落つると乞食さす子を。詞あの樣におとなしう産付さまは何事ぞ。詞あんまり憎うておりやものがいはれぬと。地むごう言ふのは可愛さのうらの濱ゆふ。幾重にもフシお慈悲。〳〵と泣くばかり。地傍仗猶も聲荒らか。親が難儀に逢はうが逢ふまいが。女めが入らざる世話。同じ兄弟でも妹の敷妙は。八幡殿の北の方と呼ばるゝ手柄。姉めは下郎を夫に持てば。根性までが下司女めと。地恥しめられてわつと泣き。詞下司下郎とはお情ない。夫も本は筋目ある侍。黒澤左中とは浪人の假の名。別れた時の夫の文に。筋目も本名も書いてござんす。地これ見てたべと差出すを。取次ぐ紙のはしくれも詫の種にもなれかしと。思ふは母より直方が。讀む文體の奥の名に。詞奥州安倍貞任とはなむ三寶。扨は貞任と緣組みしかと。地心もそゞろに懐中の。一通取出し引合せば扨こそ同筆。ハアはつとばかり當惑の。色目を見せじとずんど立ち。詞穢はしい此狀。いよ〳〵以て逢ふ事ならぬ。サア奥こちへ。

ハテ〻づつかずと早おぢやれと。地鈌い詞にせがまれて フシ母も是非なく立つて行く。なうコレ暫し。詞もう逢はうとは申しませぬ。お身の難儀の其譯をどうぞ聞かして下さりませ。地申し〳〵と。延び上り。見れど盲の垣覗きはや暮過ぐる風につれ。折から頻りに降る雪に身は濡鷺の蘆垣や。中を隔つる白妙も天道樣のお憎しみ。受けし此身は厭はねど。樣子聞かねばなんぼでも。去なぬ〳〵と泣く聲も嵐と。雪に埋もれて。スエテ聞えぬ父と。恨み泣く。次第。々々に降り積る。寒氣に膚も冷えきれば。持病の癪の差込んで。かつぱと轉べばお君はうろ〳〵。さする背中も釘氷。涙片手に我が著物。一重を脱いで母親に。著せてしよんぼり白雪を。すくうて口に含ますれば。漸うに顏を上げ。詞ヲヽお君もうよごさる。此又冷える事わいの。そなたは寒うはないかや。イエ〳〵私は。溫うござります。よう著て居やるか。ドレ〳〵。ヤア。そなたはこりや裸身。著物はどうしやつた。あんまりお前が寒からうと思うて。地ヘツエ親なればこそ子なればこそ。わしが樣な不孝な者が何として。そなたの樣な孝行な子を持つた。これも因果の中かとて抱しめ。〳〵泣く涙。堪へかねて垣越に裲襠ひらりと濱ゆふが。詞さつきにから皆聞いて居る。アツア儘ならぬ世ちやな。町人の身の上ならば。若い者ちやものいたづらもせいぢや。そんなよい孫產んだ娘。ヤレでかしたと呼入れて。聟よ舅といふべきに。抱きたうてならぬ初孫の顏もろくに得見ぬは。武士に連添ふ淺ましさと諦めていんでくれ。ヨヽヨ。地といふ中に。奥濱ゆふと地呼ぶ聲に。詞アイ〳〵そこへ參ります。娘よ孫よもうさらば可愛の者やと。老の足 フシ見返り。〳〵奥へ行く。地折しも庭の飛石傳ひ。雪明りに フシ覗ひ寄る。地安倍宗任戸を引明くればアヽ怖と。立退くお君をぢつと捕へ。詞コリヤ怖い事はない叔父ぢや。エヽイ。叔父樣とは。ヲヽそちが叔父の宗任ぢや。ヤア宗任樣とは夫貞任殿の弟御。ヲヽつひに逢はねど嫂の袖萩殿。アヽそんならお前に問うたら知れるであろ。夫婦別れる時夫に預けてやつた此子が弟の清童は息災で居るかいな。ヲヲ其清童はの。傷寒で死んだわいの。エエイ。ハア。ヲヽ歎きは理。何かに付けて一家の敵は八幡太郎。こなたも兄貞任殿の妻ならば。今宵何とぞ近寄つて。直方が首討たれよ。エヽイあのとゝ樣を。ヲヲ生け置いては我々大望の妨げ。此懷劍でと手に渡す。地難題何と障子の內。曲者待てと大將の。地聲に恟り折悪し。そちへ〳〵と忍ばせて。胸をすゑてどつか

と坐し。詞縄引切つて逃出でんと存ぜしに。見付けられたは運の極め。サアいか様とも行はれよと。地腕押廻せば義家公。縄にはあらで眞紅の糸。結びし金札宗任が。首にさつくと打ちかけ給ひ。詞網に洩れたる鱗を助けるは天の道。鳥類の命さへ重んずる我が心。況やあつたらしき勇士。命を助けソレ其札。康平五年。源義家これを放つと書記せば。此上もなき關所の切手。肩口の痣は切裂いても。武將の息のかゝつた汝。繋ぎし犬も同然日本國中を放飼。何國へなりとも勝手に行けと。地仁者の詞にハアはつと。雪に頭は下げなから。底の善悪閉隠す氷を踏んで別れ行く。地夫の最期を演ゆふが白梅の腹切刀。三方に乗る露涙。スエ外にも同じ袖萩が。思ひがけなき難題に。死ぬより外は。なく〳〵も。地歸る戸口に父嫌仗鍔に錠しつかとおろし座に直り。三方取つて頂戴し。押肌ぬいで覺悟の矢の根。取るとは知らぬ袖萩が娘に見せじと突込む懐劍。はつと驚き取付くお君。聲立てさせじと抱きしむれば。母は夫が片手に押へ。まだ女めはいにをらぬか。氣強くはいふものゝ年寄つた體。いつ何時の病死も知れぬ。聲なりともよく聞いておけと。地それとはいはぬ。暇乞とは露程も袖萩が。扨はお心和らぎしか。詞かう成り果てた身の上。どうで追付のたれ死。地これがお聲の聞納めで。ござりませうと親と子が。一所に死ぬとは神ならぬ障子押明け立寄る敎氏。母はかけおり。詞ヤアそなたは自害したか。嫌仗殿も御切腹。エイ。とゝ様も。地娘もと一度に驚き轉びおり。垣押破り張裂く胸。フシ呆れ涙に別ちなし。地手負を見屆け中納言様子具に承る。詞貞任に縁を組まれし御邊。婿の詮議もなるまじ。所詮死なで叶はぬ命。袖萩とやらんも死なずはなるまい。跡の詮議は某がよき様に計はん。健氣なる最期の様子天聽に達し。申すべしと。地冠氣高くしづ〳〵と心。フシ殘して立出づる。衣紋に薫る。風ならで。怪しや聞ゆるギン鐘の聲。コハ訝しと立戻り。フシ邊に心目を配る。一二の對の屋隅々に。太鼓の音の喧し。詞ハテ不思議や。此明御殿に陣鐘を打立つるは。何者なるぞと振返る。地一間の内より高らかに。詞八幡太郎これにあり。奥州の夷安倍貞任に見參せんと。地立出で給ふ御大將。續いてかけ寄る二人の組子。さしつたりと身をかはし。弓手馬手へはつたと蹴飛ばし。詞ヤアラ心得ず。桂中納言敎氏を。貞任とは何を以て。ホヽウ此義家。天眼通は得ざれども弓矢の道には賢き某。過ぎつる大赦の砌。桂中納言なりと名乗り來る其時より。島育を云立に

歌詠まず筆取らず。何條しれ者ごさんなれと。つく〳〵面體を窺ふに。我が幼き時見覺えし安倍頼時にさも似たり。扨こそ宮の御行方。十握の寶劍をも取隱せしに極つたり。姿を變へて禁廷へ入込みしは。猶二種の御寶を奪ひ。親が根さしの大望を達せんとの巧よな。爭はれぬ證據はこれと。地白旗を取出し給ひ。最前汝が弟宗任と。別れてほど經し兄弟の對面。梅の花によそへて我が顏を。見覺えたるかとかけたる謎。早くも悟つてコレ此歌。我が國の梅の花とは見たれどもつらねし上の句。梅の花は花の兄。我が國とは我が本國。奥州の兄ならんとの詞の割符。兄弟一致の此血判に白旗を汚せしは。源氏調伏の下心。此上にも返答あるや。何と〳〵と差付けられ。地貞任無念の牙を嚙み。逆立つ髪は冠を貫き。怒りの大息ほつとつぎ。詞エヽ口惜しやなあ。我一旦浪人となつて。都の様子を窺ひしが。官位なくては大内へ入込まれずと。流人赦免の折を幸ひ。誠の教氏は先達て病死せしを。我なりと僞つてつひに達はぬ身傳仗。けふ始めての對面に情らしく見せかけて。腹切らしたは詮議の種の一通を取らん爲。所詮謀叉しくなれば。親の敵八幡太郎相手向ひの勝負して。運を一時に決せんと。地太刀に手をかけ詰め寄れば。ハヽア急いたりな貞任。汝獅子王の勢ありとも。八方に敵を受け一人の力に及ばんや。又其方が一命は。環の宮と寶劍の所在。貢むるともよも白狀せじ。術を以て搜出すそれ迄は。いつま

でも助け置く。命存へ時節を待つて。戰場の勝負はなぜせぬぞ。今犬死して親類時が。大望は無にするか。弓矢の情は相互。夫婦の操も節義は一つ。地貞心厚き袖萩が。最期の際に一言は。妻子に詞もかけよかし。暇乞をと仁愛になうなつかしの貞任殿。詞最前からよう似た聲とは聞きながら。あんまり思ひがけもない。六年ぶりで廻り合ふ。顔見る事も叶はぬか。地死ぬる今はにちよつとなと。此目が明きたいコレお君。とゝ様なうと稚子を。見るに流石の貞任も。恩愛の涙はら〳〵。大將憐み思し召し。詞父親の縁切れたるお君。義家が子に養はんと。地仰せに儀仗有難涙。詞いかなれば某は敵と味方を婿に持つ。因果も思ひ廻らせば代代不和なる源平を。先祖に背いて縁組んだ。地我誤りを白旗の此。白梅を血に染めて。元の平家の褒紅梅。詞娘。父上いさ一所に。婿殿さらば。我が夫さらば。儀仗殿。姉様なうと別れの涙。母の袂も敷妙も。一度にわつと濡るゝ袖。御大將も直垂の。袖射削つて餘りの矢先。竹にたちまちすつくと宗任。詞最前見遁し歸りしは。兄弟本意を遂げん爲。優曇華まさりの親の敵。サヽ勝負〳〵と。フシ詰めかくるを貞任暫しと押しとゞめ。詞ノリ晋の豫讓は衣を裂く。八幡とは八つの幡此。白幡をまつ此ごとく手に取れば。八幡が首提げんは案の内。敷妙の身には大切な夫婦の縁を繼目の旗。ソレ大事に召され。地濱ゆふと渡すは舅の幡天蓋。舅が最期に魂を飜へしたる梅花の赤旗我が家の旗諸共に奥州に押立て〳〵。詞父頼時が弔軍。一先づ此場は宗任來れ。ハツア實に尤も兄じや人。雪持つ笹は源氏の旗竿。一矢射たるは當時の腹癒せ首を洗うて義家お待ちやれ。ヲヽ〳〵互に戰場戰場。それは重ねてまづ眼前に朝敵の安倍貞任。生捕つて面縛させんと。いふは表。其裝束を其儘に。桂中納言敎氏卿御苦勞さふと式禮に。詞おさらばさらばと敵味方。著する冠裝束も故郷へ歸る袖袂雁の翅の雲の上。母に別れて稚子が父よと呼べば振返り。見やる目元に一時雨。地ぱつと枯葉のちり〳〵嵐心弱れど兄弟が又。取直す勇聲。よるべ。涙に立兼ねで。幾重の思ひ。濱ゆふが身に。降る雪の白妙に靡く。源氏の御大將。安倍貞任宗任が武勇は。今に隠れなし

第四　道行千里の岩田帶

ギン傾城の。裏具癡は誠の置所。世界の客へそら言も。一人に盡す ナホス眞實の。ハル フシ戀の中なる。戀絹が寢姿恥ぢぬ中となる。フシカヽリ其こしかたの。通ひ路は花車のかけ橋渡り初。生駒の手綱せきと

むる。くつわの關を。打越えて今は女夫の藥賣。長地カ、リ草鞋に隱す八文字駕舁頼まぬ日傘フシ オクリさして行くへは陸奥。の國 フシ 睦月に出でし。都の空。谷の初聲。聞初めて。彌生は花の。生れ月うしや櫻の顏隱す。ギン霞を拂ふ。春風を仇とは誰がいひ初めて。草のはつかに解く紐の。合結ぼれ合ひし朝寢髪。しんきらしいも命かや。人目堤に ナホスフシ荷をおろし。△詞家傳葛城神靈丹。御用はござんせぬか。お求めなされ。地賈ひなさんせと賣聲も。フシ流石それしやの身なれども。迷ふは木々や若草に ギンオクリつま戀ふ。蟲の聲なくてけはひ。冷泉はがせし。くれの蝶。とまり定めぬ浮世はなんの。眞間の入江を。スエ見渡せば。月は渚に乘りおくれ。ハヤミ浪より雲に入り。舟や風に逆櫓のさつ〳〵さ。さつととわたる。鳥の聲。三下リ雁がねよ。其玉章はたが文ぞ。戀の宛名は只一人越の白山ふる里よりも。月につれだちもてくる文を。花に別れて歸るは返事。△ヲヽ嬉しヲヽ嬉し。ナホス地ヲヽそれ誠我もまた。秀立から物馴れて 小オクリ人のやりくり文づかひ。本フシ身にしら糸をおり出す。瀧は流れを立つる身に清き。心を疊ふ紙。のべにそよ〳〵こちの人さまよ。ヲヽよい女房と戯れの。フシわりなき中も姫君に。タヽキ未來の契り盃の。合井筒にかけし生駒樣。我は裏見の。○たきさしに。いつかすがりと捨てられん。エヽ。さりとては浮世ぞや。いつそ此身は此儘に。黑髪山の墨染と思ひ。切るにも。切れはせで此世ばかりの女夫とは。合ほんに結ぶの神さんも。粹の樣にもない事とはかな ナホス女の。フシ かこち言。二人妹脊のねぐら。夕風にばつと立つたる雀の宮。竹に緣ある源を守る。誓はたゞ頼め。しめぢが原のさしもぐさ我一命のあらん限りは御あり家尋ね。出して大君をふたゝび。都へきつれ川。吉左右清き道の邊の清水。ながるる。柳かげしばし。とてこそ 三返やすらひぬ。地東山道の國の果陸奥一國の出入を改め。非常を示す白川の。關の守は瓜割四郎。一人權威をつく棒さす股。琴柱に通ふ雁がねまで。赦さぬ道の關の戸はフシ嚴重にこそ見えにけり。ハル フシ生駒夫婦は關所とも。いさしら川の。 フシ番所の前。地通りかゝれば下部ども。詞ヤア慮外者めら。此處をどこだと思ふ。瓜割四郎樣の堅めの關所。笠をぬいでかつつくばひどれからどれへ參る者と斷つて通りをらうと。地留められて戀絹が。瓜割四郎と聞く驚き。フシ猶顏隱し行過ぐる。詞ヤア胡亂者遁すなと。地立寄る下部を生駒之助。アヽ申し〳〵。胡亂な者ではござり

ませぬ。御寳の通り我々は藥賣。伊達な所を目印に賣弘むるとは申しながら。あの日がさで顔隠さねば。口上の一口もえ申さぬが女だけ。顔隠すが癖となつて。關所とも憚らぬ不調法。何事も女だけと御容赦なされ。お通しなされて下さりませと。地いひくろむれば瓜割四郎。詞ヲヽ閉居けし女商人。用はない早く通れと。地赦す詞に二人は嬉しく。ヲシ笠傾けて立出づる。地戀絹が手をしつかと取り。詞イヤそもじばかりはいつ迄も爰に留める。生駒之助に用はない。戀絹置いて早く通れと。地いふに夫婦が恨りし。詞スリヤ私等を見違へもせず。お前はよう覺えてか。覺えてかとは曲がない。サハリ深山鳥も白鷺も我がつま鳥は知るものを縱姿は變つても。見違へてよいものか。地爰で逢うたは盡きせぬえにし。これから我等が宿の奥樣。何と憎うはあるまいがと。よれつもつれつ餘念なく。恥を恥とも思はぬ赤頬抱付いたは山蜂が。ヲシ花の露吸ふ如くなり。地ヤア尾籠至極と四郎を取つて突放し。詞昔は昔今は志賀崎生駒が女房。地望ならば汝が首と。替物せんと呼ばはればせゝら笑ひ。詞ヤア素浪人の分際でしやらくさい女房呼ばはり。戀絹に汝が首。添へてこつちへ受取らうと。地いふより早く切つてかゝる。心得たりと身をかはし腕首取つて引つくり返し。骨も折れよと踏付け〳〵。踏付けられて半死半生。ヤア主に敵たふ慮外やつ。ソレ遁すなと數多の下部。一度に拔いて切つてかゝる。詞ノリヲヽしをらしい蠅蟲ども。うぬらも主の相伴と。片手なぐりに切りまくられ。地詞にも似ずちりぐ〳〵に。逃ぐるを追うて生駒之助。コレなうあぶない。長追無用と。呼ばはり〳〵戀絹もヲシ跡に續いて走り行く。地一人殘つて瓜割四郎。心はやたけと逸れども。足も體もぐにや〳〵と。心太見る如くにて。立ちも得やらぬ有樣は。ヲシ目も當てられず。哀れなり。ヲシかゝる折から賣來る。地藥は町中評判の。あんぽん丹。詞御用ござりませぬか。何に利くともきかぬとも。知らぬ所があんぽん丹。御用とござれば一貝が三十二錢。半貝が十六錢。試みと申すが值八錢。地あんぽん丹御用はござりませぬかとヲシ賣聲聞いて。詞コリヤ〳〵藥屋。先づ〳〵待てと呼止め。身どもが事は瓜割四郎というて。此關所の役人なるが。角太夫地いかなる過去の報いにや。詞すは合戰に赴かんとすれば。忽ち五體ぐにやと痿え。コレ此通りぐにやと痿え。心ばかりを苛つと雖も。提燈で餅つく如く皆目とんと役に立たぬ。なんと體がしやつきりとなる。地藥があらば求めたしと。スエ世にも哀れ

に問ひかくれば。詞コレハ〳〵お前はきつい仕合者。抑も此あんぽん丹と申すは。一名を長名丸と申して。其様に氣ばかりせいて。何の役に立たぬ人に。此藥を用ゆれば。忽ち五體鐵石の如く。壁へば強敵入りかはつて合戰すとも。ちつとも弱味を喰はぬが名方。先づ試みに一貝上つて御覽じませと。地小さい錫の器物。取出して。フシ手に渡せば。地嬉しげに指先に。付けて一口呑むよと見えしがむつくりしやつきりすつくと立つて。詞ノリあら不思議や。此藥我がのんどを過ぎるや否や。忽ち五體ひり〳〵として。其あつき事火焔の如く。筋骨共に節くれ立つたる心地よさ。ハア、誠や。氣は陰にして其色白し。陰中の陰今變易して。紫の色を顯はす事。偏に此藥の德にあり。地ハア ア櫛妙なり不思議なりと。めつたに虚空を睨付け諸手を。組んで フシ立つたる有様。詞なんと奇妙でござりましよが。まだ責道具が入るならば。具足なりと兜なりと。鉢卷もござります。申し其代りに。必ず茶をあがりますな。湯茶をあがると元の通りにぐにやつきますぞ。地ヲ、過分々々と代物渡せば藥屋は。フシ箱をかたげて別れ行く。始終の様子をとくよりも。戻りかゝつて立聞く二人。戀絹が耳にロ。何やら呻き生駒之助。フシ元の所へ立忍べば。地戀絹態とおろ〳〵聲。生駒之助様いなうと。呼ばはり〳〵。うろ〳〵とハヌミ尋ね。さまよひ。四郎にばつたり。ヲ、怖誰ぢやと フシ立退けば。しがみ付き。詞イヤこはい者ぢやない。只居より四郎ぢや〳〵。そもじを待つて最前から。地しやきばつて居るわいのと。餘念のないを見て取るそれしや。ヲ、詞お前なら惚りはせぬわいな。誰ぢやと思うて痞が上つて。地あいた〳〵と胸撫でさすれば。詞何とした〳〵。癪でも痛むか。地藥やらうと紙入より黑丸子。詞ア、申しお慮外ながら。水でもあらば。一口に呑まして下さりませ。イヤ〳〵。水は毒だ。地茶を呑まさうと番所より。茶瓶茶碗持つて出で。コレ一口と差出せば。詞ア、申しぬるいやらあついやら。呑んで見てくれたがよいと。地氣を持たされて實にも〳〵。我等が呑みさし呑む氣ぢやの。コリヤ忝いとぐつと一息。呑むと其儘ア、〳〵〳〵と。いふより早く體は忽ちぐにや〳〵〳〵。たわい。やくたい フシ並木の蔭を。地立出づる生駒之助。詞扨もきついうつそりめ。汝がほんのあんぽん丹。地付けう藥のないやつと。どつと一度に打笑ふ。地折から又も追ひくる人音。とてもの事に跡腹の。痛まぬ様にしていこと。上張ぬいで手つ取早く。瓜割四郎に打着せ〳〵。暫し木蔭に立忍べば。引

返す數多の家來。詞ノリソレ最前の藥屋め。遁すなくゝれと衣裝を目宛。地大勢寄つて手取り足取り。騷立つたる隙間を考へ。時分はよしと戀絹夫婦。跡をも見ずして　三重へ遁れ行く。寒林に骨を打つ靈鬼。深野に花を供ずる天人。風飄茫たる安達が原。隣る家なき一つ家の軒の柱はすね木の松。己が氣儘にまとはるゝ蔦は逆立つ鱗の如く。いづれの工か青龍の形を削りなせしかと　フシさも物。すごき破屋に。ハル　フシ住馴れ居馴れ。手馴れたる。抔の車やわくらはに。來る人稀の黃昏時。詞御無心ながら煙草の火。地一つ貸して下さりませと。笠を片手に旅の者。老女は鑿をくり止めて。詞ヲヽ暮れるまで歩かしやますは。何ぞ火急の御用か。ア、ちつと急ぎの爲替銀。福島まで持つて行く者ぢやが暮れるので氣がせきます。何ぢや爲替銀を持つて行くのぢや。アノ銀をや。ヲヽ此物騷な安達が原追剝に出合はぬ樣に。地用心していかしやませと。いはれてこなたは惚り顏。詞アノ追剝が出ますかの。ヲヽ出るとも〳〵。昨日も丁度今時分にアレ。向ふの森の中で殺された人がある。地ヤアといふより身はがた〳〵。詞申しかみ樣。我等生れ付いて其追剝がきつい禁物。どうぞ今夜は爰の内に泊らして下さりませ。いやなう其樣な銀持つた人を。こちの内に留めてはマア。氣が張つて夜がねられぬ。サアそこがお情。お慈悲はかみ樣。ハテ夫程怖か泊めて進ぜう。地ハイ〳〵それは近頃忝いとッシ草鞋解いて上り口。詞ヤレ〳〵嬉しや。是で心が落付いたイヤ。めつたに落付かしやんな。爰に泊つてもこなたの懷に銀があると。又追剝が來をろもしれぬ。其銀淡々が預りましよイヤそれは。ハテ扨惡い事はいはぬと地手を差入れて引出す財布。それ渡してはとしつかと握り。詞おばゝこりやわごりよが剝ぢやの。何のいの預つてやるのだと。地財布持つ手に兩手をかけ。引けばこなたも門口の柱を片手にひんだかへ。引いつ引かるゝ力に腕すつぽりと。拔けて尻居にへたばる老女。詞コリヤおれを殺すかと。よろめく旅人を打倒し。のつかゝつて吮へ。ほうど喰付き喰殺す老女の業ぞ。フシ恐ろしき。ア、嬉しやと地疊を上げ死骸を蹴落し口のはた。拭ふ血汐の腕取上げ。詞エ、しぶといまだ財布放しをらぬ。アア儘よ。腕ぐち取つて置かうと。地孝桶の底へコハリ取納め。又繰返す糸よりもナボス頭の。フシ孝持かき亂す。地草に育てど草ならぬ花は鄙でも都でも。可愛らしさと憎さげは。跡から付いてあんぼん丹。聲がはりのした大前髪。詞コレ〳〵お娘。こりやどこまで連れていかんすの

ぢや。日は暮れる幸ひ人のこぬ安達が原。此草叢でついちよこ〳〵。祭の太鼓打ち仕舞はんといきつた撥の納めばがない。サア〳〵 地 爰でと鼻息も 詞 オ、せはしな。まだ暮れきらぬ薄明り。誰ぞが見たら恥しい。袖の振合ふも他生の縁と。今來る道でお近付になり。此片遠所まで送つて貰うたお前。私が使に行く家ももう此處。ちつとの間門口に 地 待つて居て下さんせ。ついい口上いうて出て戻る。其内には暗うもなり。ハテどうなりとお前次第と。跡は得いはず顔赤らめ。袖打掻ふおぼこ氣に。現ぬかして。 詞 そんなら爰に待つて居る。必ず早う戻ろぞやと。 地 門口にすつくり松の木立。娘は内へ入り口の フシ 戸を押明けて。 詞 アイ今歸りましてござんすと。いふに主が不興顔。わしにも知らさず出あるいて日の暮れるまでどこに這入つてござりました。大事の身を持ちながら大膽な一人歩き。嗜ましやませと 地 つかうども。如才ない氣を呑込んで。 詞 サアわしもお前にいうてからと思うたれど。 地 又供の人雇ひのと世話になるが氣の毒さに。沙汰なしにいて來たはソレ今のナ御病人の御願やら何やらかやらの神參り。重ねてからは斷つて參りませう。もう堪忍して下さんせと。斷り聞いて心も折れ。 詞 ハテ神參りとあれば何の否と申しませう。此樣にとが〳〵いふもお前のお爲。人に見られてはならぬ身の上。かういふ中も誰が見まいものでもない。早う奥へござりまして。何かに心を付けてナ。御合點か。用があるならつい此婆婆を呼ばしやりませ。必ず端近う出まいぞや。 地 サア〳〵早うにあい〳〵の。返事しながら表の樣子。主の耳へおくの間のフシ 障子押明け入りにける。 地 門には何にもしら犢の首程長う待ち草臥れ。うろ〳〵内を指覗けば。 詞 誰ぢやどこの人ぢや。小暗りに胡散らしい。イヤ大事ない者ちつと用があつて。めんようなもう出さうなものぢやが。コレ〳〵そこな人。出さうなとは何が出さうな。ヤアノ出さうなというたのは。もう月が出さうなといふ事ぢや。ム、。月の事か。そしてマアうろ〳〵とこなた何ぞ落したか。尋ねるのなら火を點してかしてやりましよ。 地 ソレ幸ひの高燈籠。大儀ながら下して下されと。 フシ いひつゝ取出す火燈箱。こち〳〵打てばこて〳〵おろす。戀の闇路を照すとは氣當りよしと心で悦び。フシ 又引上ぐる細引の。長い鼻毛で釣りかけた。娘はまだかと。指覗き。 詞 コレ婆樣樣爰の内へたつた今娘が一人來ましよがの。ヲ、來たがそれが何とした。サア其娘に。もういなんか待つて居るというて下されハ、、、、。いなんかとはどこへ

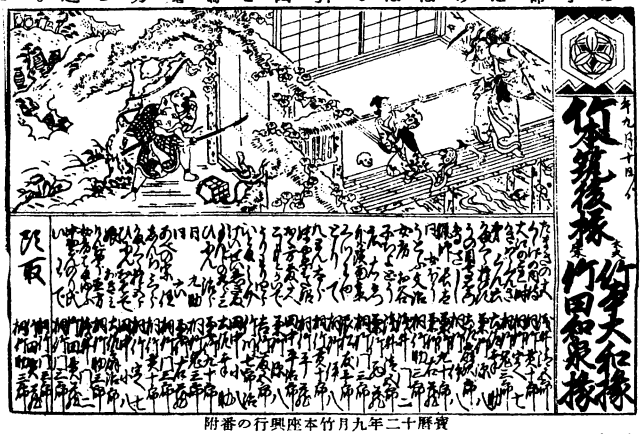
いなんか。ありや餘所の者ぢやない。こちの内の娘ぢやわいのヤア。あの今來た娘は爰の内の娘かえ。南無三しまうた。ホウ氣疎なげな顏わいの。今日氏神へ參つた戻りに。だれやら送つて貰うたというたが。ム、扨は此方であつたの。これはまあ〳〵若い人ぢやが。奇特によう送つてやつて下さつた。遠道を歩いた草臥やら。もう奥に寐て居ます。こなたもいんで休んで下され。ヤレ〳〵大儀でござつたと。地戸口をぴつしやり立て出され。物も得いはずむしやくしやと面皰だらけな赤ら顏。膨らかしてもせう事なく。テモむごいめにあはしをつた。結構な釣者がかゝつたと思ひの外。あちらこちらへ釣られてのけた。エ、いま〳〵しい。けたいの悪い娘め。どうするぞ覺えて居いと。ハヤミ フシつぶやき〳〵立出でしが。地何思ひけん立歸り。裏の藪垣押分け掻分けオクリ忍び。入るともしら糸の。サハリ簪にくりまく拝車。ナホス廻る月日の關の戸を。漸う遁れ。生駒夫婦。行く先とても定まらぬ當無し旅に行付次第。安達が原の高燈籠 フシ心便りに辿り着き。詞コレ繼絹。若しも關所の追手が來うかと。氣のせく儘に日を暮らし。とん と宿を借り損うた。跡の村で聞いた爰が彼の安達が原。何と廣い野原ぢやないかいの。地ほんにまあ方角さへ知れぬ所。道に迷うたらどうせうと。案じてわたしや癪が痛い。詞何の案じる事がある。氣遣ひしやんな。高燈籠があるからは地家がなうては叶はぬ筈と。逐見廻しあるぞ〳〵。あれ〳〵あそこに火の光。こつちへおぢやと。フシ戸口に立寄り。詞案内知らぬ旅の者。足弱を連れ暮に及び難儀致す。一夜を明かさせ下さらば上もなきお情と。地案内すれば老女は立出で。詞それはまあ〳〵おいとしや。殊に女中もあるさうなに。お泊りなされと申したけれど。氣の毒は間所もア、申し〳〵たとへ牛部屋。灰部屋でも。一夜お泊め下さらば生前の御厚恩。ハテ不自由をお厭ひなされすば。成程お泊め申しませう。地これは〳〵忝しと夫婦が悦び杖草鞋。脚絆の紐もとく〳〵と。フシ二人を誘ひ内に入る。詞見ました所がお侍どれからどれへのお出でぞやと地尋ねに繼絹會釋して。詞アイ私どもは都の者。はる〳〵と此國へ參つたは。幼い時に別れたるア、これ〳〵女房。イヤ我々は當國松島一見の爲。それは格別。時ならぬ高燈籠はお國の風か地但しお志の常夜燈かと フシカヽリ脇道へころばす氣轉。主は何の氣も付かず。詞御尤ものお尋ね。此所は安達が原と申して。山なり原なり道の知れぬ街道。丁度お前方の樣に道に迷うて難儀する人が多い故。あの樣に燈籠を

ア〳〵お前方も。こぼれかゝつた者を連れて旅するとは大膽な。ドレわしがお腹を見てやろと。地懐へ手を差入れ。詞イヤ〳〵まだ。今やちよつとの事ぢやない此痛はつい直るとそろ〳〵胸を撫でさすれば。地懸絹は心地よく。詞ほんにとんと痛が直りました。お前様はお功者なと。地聞いて夫も フシ落付く吐息。詞イヤあんまり落付くまい。何時の知れぬおなか。したが道中の冷が入つて心安うは出來ますまい。アヽ何ぞよい薬を進ぜたいものぢやが。ヲヽ幸ひな事がある。此野はづれの庄屋殿に。結構な安神散がある。ありや早めにもなる薬。わしがいて買うて來て進ぜたけれど。年寄つて夜道は叶はぬ。大儀なからこな様いてと。いうても道の案内知らずである。いつそわしと二人いて買うて來ませう。コレ女中ちつとの間ぢや。留守してござれや。あの薬一服呑むと心安うまめになる。それはまあ〳〵いかいお世話。地生駒様も御苦勞ながら。あなたと一所におつと合點。我等は先へいこま之助と。フシ口合たら〳〵立上れば。地老女も小褄かい取つて。必ず氣遣ひな事はない程に。ちつとの間待つてござれ。わしが留守の中に奥の襖を明けまいぞ。地サア〳〵ござれと フシ打連れて。地戸口へ出でしが立ちどまり。詞コレ薬代がいるが路銀は持つてか。成程肌にござりますおつとよし〳〵コレ女中。かんまへて閨の内を覗いてばし見やしやんなと。地念に念押す老の坂。ノル地道の助けは生駒之助 オクリ伴ひてこそ出でて行く。ハルフシ跡には一人懸絹が。心細さに行燈の。火はかき立ててかき曇る空も フシ物うき旅の宿。詞ほんにまあ。人の行方と水の流れほど定まらぬものはない。都の者が陸奥三界。しかもやゝまで產む様に

点し。往來の衆の助けにするも。先立たれし連合の未來の闇を照す明り。これは〳〵限りもなき大功德と。地咄の中に懸絹が。スエ旅の勞が フシ苦しむ體。詞コリヤ女房何としたと。地寄添ふ夫を力草。詞どうした事やらきつうお腹が痛みますと。地聞いて悔り。詞何ぢや腹が痛い。地サア〳〵事ぢやとうろつく夫。詞コレ申し何をマア其様に。腹の痛むは旅勞。水の變りである事と。地落付ける主氣のせく生駒。詞イエ〳〵〳〵。そんな事ぢやござりませぬ。何を隱さう女房は此月が臨月でござります。大方其氣が付いたもの。ヤア何ぢや。此月が產月ぢや。アノ此女中が。ハテ扨それはと。地心の工面。夫はあはて立つたり居たり。コレ申し。詞どこぞ笑らに餅屋があるなら。地取上婆を味噌汁で。炊いて喰はして下さりませと。何をいふやらフシうろ〳〵きよろ〳〵。詞マ

なるといふは。地ア、思ひ廻せば女程。長地あぢきない者はないと。打悄れしが。ア、ぐち〳〵。詞たとへ野の末。地山の奥でも。かはい男と。一所に居るが身の樂しみ。詞どうぞよい男の子を產んで。主の悅ばしやんす顏が早う見たい。したが若し女の子など產んだら機嫌が惡うはあるまいか。ア、まゝよ。女子ぢやとてまんざら捨てうともいはれまい。二つ取りならよい男の子を產んで。地夫婦が中に添乳枕。ねん〳〵ころゝん〳〵がいうて見たいと女氣は。フシそれしやの果でもしどけなき。地次第に更くる夜嵐の。身にしみ渡つて物凄き。フシ安達が原の軒もる月。詞エ、遲い事ではあるぞ。こんな廣い所にわし一人置いて。つい戻つてくれたがよい。ぼんに今のかみ樣が地閨を覗いて見なというてゞあつたが。一寸見ようかイヤ〳〵。何ぞ怖い物でもあつたら惡い。ア又見たい物でもありと。地氣味惡ながらそろ〳〵とフシ障子開いて。詞何やら。白い地物があると手に取つて。詞ナウ悲しや髑髏ぢやと。地逃退く拍子に孕桶にばつたり。詞ヤア爰にも亦人の腕と。地氣も魂も消入る思ひがた〳〵震ひ漸うと。フシ表の方へ逃出づれば。地後にすつくり白髮の婆々。詞申し〳〵。コレ申しと。地呼ばはる聲に又悔り。詞イヤ怖い者ぢやない。主の婆々でござるわいのと。地閉いて少しは人心地。詞ぼんにお前はおかみ樣。いつの間にお歸りぞ。地定めて主も一所であろ。ちやつと呼んで下さんせと。フシ胸撫でおろすばかりなり。詞イヤ連合はまだ跡に。こなたにちつと用があつて。婆々一人戻りました。何ぢや連合はまだ跡にぢや。エエ又きり〳〵戻つてくれたがよい。手が出るやら。髑髏が出るやら。どうやら氣味の惡い內。地どれ迎ひにと。冒捨て出づるを引きとゞめ。詞其夫の戻られぬ先に。此方に婆々が無心がある。サア其無心といはしやんすは。路銀を貸せといふのであろ。わしが肌には無いによつて。ちよつと夫を呼んで來て。イヤ銀ばかりぢやない。路銀よりまだ外に。こなたの肌に付けた物がある。それをばゝが貰ひたい。ム、銀より外にわしが肌に。付けた物とはイヤ外の物ぢやない。こなたの腹な子がほしい。ヲ、あのかみ樣とした事が。地そんな事なら人をびく〳〵さゝんがよい。お前樣のお世話で不具でもない子を產んだら。其時はどうなりと。詞イヤ產んだ子は役に立たぬ。まだ腹にある中を。于籠というて大銀になる大妙藥。それで其子が貰ひたい。エイ。あの胎內にある子を。どうしておまへイヤ心安うとられる。つい其腹を。裁割つて。ホ、

ホ、、。あの子とした事が。何のそれを震ふ事で。ばゝが痛うないやうに。ついー思ひに殺してやる。よい子ぢや美へちやつとごされ。アイ。はて扨しぶといごされいの。すりやわたしを殺して。ヲ、くどう。其藥がほしさに。とうから尋ねた孕女。世間に澤山にある物なれど。尋ぬる時は意地悪うない物いの。コレぐづ〳〵して際入れて下さんな。きり〳〵殺してまだ寺參りせにやならぬ。年寄は後生一遍南無阿彌陀佛。地南無阿彌陀佛と唱ふるロは耳まで裂け。安達が原の黒塚に。フシこもれる鬼といひつべし。地繼絹あるにもあられぬ思ひ。私を殺すと仰しやるも銀から起つた事なれば。路銀も殘らず上げませう。まだ其上に此衣類剝いでなりとも助けてたべ。辛い命を存へて。陸奥までさまよふも。何とぞ安う產みたいばかり。地よく〳〵深い緣なればこそ私がおなかをかり初も。十月に及ぶやどり兒にせめて此世の明りを見せ。一日なりとも親よ子と。互に呼びつ呼ばるゝまで。命が惜しい。死にとむない。詞慈悲ぢや。コレ申しと。地取付き歎けど。フシ聞かぬ顏。詞何やらいはしやるさうなが。年寄といふ者はの。コレ此耳が遠いわいの。ドレ。そろ〳〵やりかけうと。地小褄引上げ玉襷。際を覗ひ繼絹が。逃出づるを引戻し。懷劍逆手に取廻せば。何とせんかた涙聲。アレ。詞聲が高い。サア〳〵それでも。地エヽ息の根とめよと突つかくる刃先をよけてもよけさせず。付けつ廻しつ追廻り。なんなく肩先切込まれ。立つ足さへもたぢ〳〵〳〵。又突つかくる白刃の切先。兩手に


仮名手本忠臣蔵
竹田出雲
三段目
大星由良之助
竹田出雲
二段目
大星力弥
竹田出雲
九段目
大星由良之助
竹田出雲
七段目
大星由良之助
竹田出雲
五段目
大星由良之助
竹田出雲
四段目
大星由良之助
竹田出雲
十段目
大星由良之助
竹田出雲
八段目
大星由良之助
竹田出雲
六段目
大星由良之助
竹田出雲
一段目
大星由良之助
竹田出雲
仮名手本忠臣蔵
竹田出雲
九段目
大星由良之助
竹田出雲
十段目
大星由良之助
竹田出雲
八段目
大星由良之助
竹田出雲
七段目
大星由良之助
竹田出雲
六段目
大星由良之助
竹田出雲
五段目
大星由良之助
竹田出雲
四段目
大星由良之助
竹田出雲
三段目
大星力弥
竹田出雲
二

握つて。詞こりや。是程いうても聞入れず。どうでもわしを殺しやるの。エヽこなたは。鬼かいの蛇かいの。死ぬる我が身は。因果とも因縁とも。諦めても死なれうが。地可愛や此子が。闇より闇に。迷うて母を尋ねうと。思へば悲しい。死にとむない。地何の因果でわしが身に。やどつて來たぞと身を顫はし フシもだえ。歎くぞ道理なる。詞エヽ七面倒な世迷言と。地懐劍しごけば紅の。血汐に染る手を合せ。詞どうぞお慈悲に。連合の歸られるまで。せめて名殘にたつた一目。逢うて死にたい。顔見たいと。地延上つて表の方。詞生駒様いなう。わしや今切られて死ぬわいの。地我が夫なうと泣叫ぶ。聲さへいとゞ。フシ遠近の空吹く風の音ばかり。詞コリヤ世話やくないやい。其連合はな。方角知れぬ山中へ。突放して戻つたれば。今時分は猪や狼に。喰殺されてをるであろ。其跡へ廻つて。路銀はこつちへしてやるのぢや。何とようしたものか。夫に逢ひたか。早う冥土へやつてやろと。髻摑んで肝のたばね指通されて七顚八倒。苦しむ體はくる〳〵〳〵。輪乘の如く打跨り乳の下より十文字に。腹裁破る有様は フシ目も當てられずむごらしき。地斯うとも知らず生駒之助。山道に踏迷ひ漸う歸る表口。フシ戸をほと〳〵と音づるれば。地内には悔り老女が敗亡見付られては一大事と。赤子の血汐を手つ取り早く用意の器に絞り込み。見廻す傍に以前の髑髏ハテ怪しや。詞此髑髏に浸込む血汐と不審は立てど氣はわくせき。地女の首にかゝつたる守り袋の紐引切り。一つに集め奥の方 フシ指足してぞ忍び入る。地表は猶も打叩き。詞女房ども戻つたぞや。戀絹。地々々と呼べど叩けど音せぬは。ハテ不思議なとさし覗き。見れば血に染む女房の死骸南無三寶と氣は半鬱。門の戸踏明け驅入つてヤレ女房。詞何者が手にかけしぞ。地戀絹やいと言ふかひ更に亡骸を。抱上げて立つたり居たり。詞エヽ遲かりし殘念々々。さぞ我を待ちつらん。地可愛の者やいぢらしやと スエテ前後涙にくれけるが。地泣く目を拂ひ。疵口に心付き。詞ムヽ腹をあばき。胎内の兒まで手にかけしは盜賊のわざとも見えず。何にもせよ此家の婆々。我を出しぬき歸りし曲者。地引括つて詮議せんと裾端折つて奥の方。主が閨とおぼしき一間間の戸襖踏開けば。内は珠玉をのべたる御殿。羣簾卷上げてたをやかに打臥し給ふ稚宮。傍に從ふ老の身も賤の姿を引替へて。コハリ十二單に緋の袴。白髮額をさげ髮や敬ひかしづくナホス有様に。荒れし生駒も進み兼ね暫らく。フシためらひ居たりしが。地ちつと

も應せず大音上げ。詞ヤア體に綾羅は纏へども禽獸に等しき狸婆々。妻の敵子の敵覺えがあらう覺悟せよと。地詰寄れば はつたと睨め。詞忝くも當今の弟君環の宮の玉座間近く尾籠の振舞。かくいふ我は奥州六郡の司安倍太夫頼時が妻。情なくも我が夫を八幡太郎に亡され。無念の月日を送る中。成長したる貞任宗任。環の宮を奪取りしは。奥州の内裏と仰ぎ。諸人をなづける謀叛の根ざし。地いかなれば此君。我が國へ下向の時より物いひ給ふ事叶はず。一天の君としてかゝる難病世の嘲り。とやせんかくやと醫術さまざ〳〵。詞昔漢の代に或人此病を煩ふ。名付けて止聲病といふ。其頃看婆が祕密の家方。孕める女の腹を裁ち。胎内の兒の血汐を用ひて立所に平癒す。地我是を行はんと。普く。産婦を尋ぬる所に。詞今日思はず汝が女房。天子のお役に立つたるこそ類稀なる身の冥加。地それのみならず人を殺し。金銀衣服を奪ひしも。皆軍用の助けの爲と。始終を聞いて驚く生駒。詞ム、貞任の母儀とあるからは。手にかけられし女が爲にも。ホ、。則ち母といふ事か。サア。然らば娘と存じの上イヤ知らぬ。娘と知つたはたつた今。地無念の最期をとげられし。夫頼時の魂魄をいますが如く此日頃。詞祭り置きたる髑髏に。女の血汐しみ込みしは。親子の血筋疑ひなしと。捜し見れば此守に吾が家の系圖書。扨こそ知つたる娘が身の上。地往時の敗軍に親子兄弟。ちり〳〵になりし時。乳母に抱かれ別れし後は。都九條へ賣られしと聞きつれど。尋ぬ問ふべき邊もなく。打捨て置きしが彼等が仕合。詞思はず知らず我が娘が君の病の藥となるは。手柄者とも果報とも此上のあるべきか。でかしをつたととてもなら譽めてやつて殺さうもの。何にも知らず死にをつたがたつた一つ殘念なと。地鏡のやうなる兩眼に堪ゆる涙はら〳〵〳〵。實にも貞任宗任を フシ産落したる骨柄なり。地生駒之助感じ入り。女に稀なる大丈夫さりながら。玉簾深き若宮を如何して奪はれしぞ。ヲ、それこそ宮の御乳母。匣の内侍を頼み。密に御所を立退かせし。詞いざ匣殿。此藥を宮様へ。とく〳〵すすめ申されよと。呼出せば一間より賤の姿を其儘に。立出で給ふ匣の内侍。ヲ、それこそ待兼ねし。宮様の御爲には親とも姉とも。賢へん方なき老女の情。詞二十日餘りの月影を移して用ゆる此藥法。いで御藥を奉らんと。地空に冴え行く月影を映し取るよと見えけるが。何とかしけん器ばつたり谷底へ。落ちて血汐に染めなす岩角。こはそもいかにと驚きながら見下す谷の岩間より。俄に渦捲く水の

あし。コヘリ清々〳〵と滔々と湧上れば。内侍は水氣に目も放さず。守り詰めてあら不思議や。詞今産婦の惡血谷底に滴れば。忽ち谷水逆捲上つて土中の穢を清むる事。誠や水晶は瑕を受けず。蓮葉は泥に汚れず。か程奇瑞を顯はすは。正しう尋ぬる十握の御劍。此巖中に隱しあるに疑ひなし。地ハア、有難や忝なやと。女姿もいつしかに引變つたる變生男子。眉逆つて目の内も威あつて猛き。フシ其有樣老女は猛つてうなり聲。詞すりや匣の内侍と僞りしは。寶劍詮議の方便よな。ホヽ御劍失せさせ給ひしは。汝等親子が業ならんと内通の心を見せ。義家が一子八者を以て環の宮と僞り。女姿と樣を變へ付添ひ來りし某は。八幡太郎義家が末弟。新羅三郎義光と。始めて名乘る武將の系圖。さすがの岩手も驚きに フシ只茫然たるばかりなり。地生駒之助進み寄り。詞君は稚き時よりも他家にて育ち給ひし故。かく申す某まで御顏見しらぬ幸ひに。驚入つたる御方便。地不審なるは其御種。物いひ給はぬ病とは。詞ヲヽそれこそは稚き者に。何事ありとも物いふな。事顯はれては一大事といひ含めたる止聲病。地今日寶劍の有所知れたるも汝が妻が死したる故。莫大の功なれば。詞兄に代つて勘當赦し。元の如く主從ぞと。地情の詞に生駒が悅び。フシはつと平伏すばかりなり。地岩手は無念のぢだんだ踏み。エヽ口惜しや腹立ちや。詞現在娘を殺すといひ。これまで心を盡せしも。皆徒事であつたよな。地よし此上は何とせん敵の片われ其ちつべい。ひねり殺して冥土の供に連れんずものと立上る。詞さうはさせぬと支ゆる生駒。地振切る袂とゞむる袖。放せ放さじもみ合ふ後の襖を踏明け。詞鎌倉の權五郎景政。とくよりこれに守護致すと。地呼ばはり出でしは以前の前髪。肌は小具足小手脚當八者抱き突立つて。詞若君の仰せを請け。岩手といふお婆を釣りに。此國へ入込んだはかういふ時の後詮の役人。叶はぬ修羅くら燃やさずとも寶劍出し降參せよと。地聞くより猶も無念の齒がみ。これまでなりと白刃の切先腹に突立てどつかと坐り。詞とても叶はぬわが運命。かゝる方便のありとも知らず。夫の敵國の仇。子供に討たして高名させんと。我慢に凝つて邪非道。人を人とも思はぬ天罰。地忽ち報うて血を分けし。娘を親がなぶり殺し。さぞや苦しかりつらん。地獄畜生餓鬼修羅道。其苦しみを身一つに。受けし因果を斷切つて。冥土の旅で言譯せん。娘よ。孫よ暫く待てと。突込む劍を口にくはへ。緣先よりまつ逆さま フシ落ちてはかなくなりにける。地新羅三郎進み立ち。詞寶

劍は此谷底某向つて守り奉らん。地兩人外面に氣を付けよといひ捨て谷へ飛び込めば。下に伏せたる隱し勢。提燈松明振立て〳〵。遁さじやらじと 三重へ挑み合ふ。フシ谷には新羅。上には兩人投げおろしたる大木大石。壓に打たれて數多の人數微塵になつて死してげり。猶もためらふフシ山陰より。詞安倍の貞任これにあり。見參せんと呼ばはつて。地寶劍携へしづ〳〵立出で。かゝる術もあらんかと。母にも知らせず付け置く番人。手向ひせしは彼等が役目。弟宗任を助けし義家。敵に恩を受けながら軍せんも心よからず。さるによつて此御寶。只今渡すは宗任が命の返禮。再會は戰場と義家に傳へよと。地寶劍渡し傍なる母の死骸を抱き上げ。詞不孝の悖遲參の誤り。やみ〳〵生害させませし。地殘念至極と物數を。いはねど籠る千萬無量。新羅三郎感じ入り敵ながらもあつぱれ勇士。辭退申さぬ寶劍の納まる所は戰場々々。先づそれまでは。おさらば。と寶劍携へヤア〳〵生駒。詞老女の作れる罪科も高燈籠の光にあり。其火を消すは汝が手向と地仰にはつと立寄つて。松の立木を切倒せば法の。光も。消失せて忽ち修羅の太鼓鐘。相圖に寄せくる數萬の軍勢すは事こそと權五郎。生駒も谷へおり立てば。ヤア〳〵騷がれな方々。詞高燈籠は此家の狼煙。消ゆると集まる手筈の軍兵人々の警固して。八幡太郎の陣屋まで恙なく送り居けよと。地寬仁大度の詞にはつと諸軍勢。フシ四方を圍む歸國の供。冥土の供はなき母の死骸を抱く貞任が。胸は苧拵とかき亂す糸の。亂の苦しさをこたへる涙。はら〳〵にオクリ衣の。たては綻びて。裾や袂とフシ別るゝ道。詞ノリ勇むは新羅權五郎。地生駒が背に。甥の殿。老いぞ籠りしこの原を。コハリ鬼籠れりと讀みなせし。安達が原の。黑塚の。其古事を末の代に語り。傳へて殘しける

第五

地深きを以て。淺きに入り淺きを以て深きを知る。其源や武將の大度。八幡太郎義家公。貞任が籠りたる小松が柵に押寄せらる。附從ふ輩には。舍弟新羅三郎義光。鎌倉の權五郎景政。其外一騎當千の。鎧の袖も白旗もフシ風に。靡いて目覺しき。地景政御前に兩手をつき。詞兩將には暫く木蔭に御屯と。地勸め立てたる折も折。どつと寄手の鯨波。景政きつと見。詞ヤアちよこざいなる蠅虫めら。一所にかゝれと大手をひらげ。地當るを幸ひばら〳〵〳〵。さながら秋の木の葉武者。勇氣に恐れて軍勢ども。敵はぬ赦せと逃げ行くを。遁さじやらじとフシ追う

て行く。地引遶へて陣頭に。踴り出でたる安倍の宗任。新羅三郎これにあり。望む所の宗任め。惡事の固り打碎かんと。地ぐつと引拔く並木の松。微塵になれと打ちかくる。コリヤ〳〵〳〵とねぢ合ふ強力とゞまる勇力。いづくよりかは白羽の矢先二人の胸板。はつと ﾌｼ驚く間もなく。地貞任義家東西より立出で給ひ。詞ホヽ珍らしや貞任。汝命の恩を忘れず。三種の神器を別條なく此方へ渡し。宸襟を休め奉る上からは。義家が首取つて賴時が冥土の妄執はらせよと。地さも潔くの給へば。はつと二人は頭を下げ。詞ハツア有難き御一言。日頃の恨みと貞任が。地つつ立上つて鞘ぐちに。はつしと兜を打落し。拔くより早く我とわが右手の小脇にぐつと突立て。大將の前にどつかと坐り。詞三十年來父の敵討たうと思ふ鐵石心。義家公の御惠みに忽ちとろけし此上は。弟の宗任を御家來となし下さらば。生前死後の面目と。地苦しき中にも弟をスエ思ふ眞實。親身の血の涙。地大將不便と思召しいかに宗任。詞心を改め我が幕下に從ひ。安倍の家を引起せと。地惠みも厚き御詞。今こそ願ひ達せし貞任。いづれもさらばと ﾌｼ勇氣の最期。地又も聞ゆる鐘太鼓敵にはあらで鎌倉の權五郎瓜割四郎を提げ出で。詞主君に敵對ふのら猫め。これを喰うて死ねと打付くる。地引つぱづして逃行くを。襟がみ掴んで宗任がぐつと一しめ忠義の手始め。かゝる所へ匣の內侍宮を誘ひ生駒之助。維時を高手に縛め御前に引据ゑ。詞謀叛の張本大江の維時。宮を奪取り此國へ落下る。半途に出合ひ斯の通りと。地詞の下に一太刀づつ。朝敵亡びて源氏の勝鬨。早や凱陣とおだやかに國も。治まる君が代の。夜に增し日に增し繁昌は源。氏と藤

けり

千前軒門人
近松半二
作者 北窓後一
竹本三郎兵衛

寶曆十二年
壬午 九月十日